

学内広報

for communication across the UT



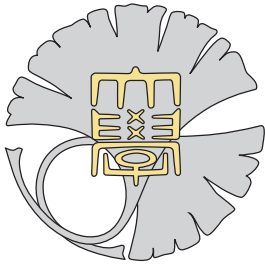
特集：■東京大学ロゴ事典

2011.1.25

No. 1408

2011年がスタートしました。今年の学内広報・年頭特集では、さまざまなロゴ、マークについて特集いたします。第1弾は、東大マークをはじめ、学部・研究科を中心に、東大を彩るさまざまなロゴ、マーク、紋章とそのいわれを集めました。分かりやすく、自分たちのことを伝えるにはどんなカタチがいいか、試行錯誤を重ねて制作されたロゴ、マークへの思いを感じていただければと思います。

「東大マーク」の歴史



「大學」の文字は金色、「银杏部分」は銀色

かつて本学が日本で唯一の大学であった頃、明治19年4月に制服、制帽などが定められました。その後各地に帝国大学が設立され、いずれも同一の制服などで区別がつかず、第二次世界大戦後の混乱期にはきちんと制服を着用している学生はほとんどいなくなっていました。

そこで、時代に即して誰にでも簡単につけられる「目印」として、「本学を象徴しかつ品位のある」バッジを制定することになりました。昭和22年5月に、本学学生・生徒・卒業生から図案を募集したところ、応募総数は79点。選考会4回、学内世論調査2回（投票総数4,150）を経て、昭和23年6月の評議会にて「银杏バッジ」が制定されました。図案の原作者は、故星野昌一名誉教授（当時、第二工学部教授）でした。



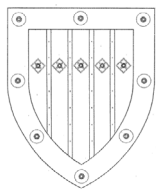
もうおなじみ！
現在の「東大マーク」

この「银杏バッジ」マークはさまざまところで使われましたが、银杏の葉の切れ込みの入り方、葉柄部分の曲線、「大學」の文字の大きさ、色などが統一されていませんでした。そこで平成16年の法人化の際に、こうした現状をかんがみ、新たな「東大マーク」を制定すべきという考えから、佐々木毅総長（当時）の指示により、渡辺浩副学長（当時）を主任とする「東京大学アイデンティティ作業班」が組織され、検討作業がはじめられました。

現在の「東大マーク」は、「银杏バッジ」のデザインをもとにして、多摩美術大学講師・原田泰氏（当時）のご協力のもと、葉の切れ込みなどに新たな工夫を加えて作られました。基本的なデザインとして従来の二枚の银杏の葉を用いたのは、大きな変化にあたって東京大学がこれまでの長い歴史と伝統をふまえ、世界の大学教育・学術研究をリードしていこうという決意のあらわれです。上の葉に秋に色づいた银杏の黄、下の葉に東大のスクールカラーとされる「淡青」に因んだ青を用いています。

医学系研究科・医学部

「医学部の紋章」のいわれ



昭和31年(1956年)東京大学医学部創立百年の祝意を表すため、緒方富雄教授(医学部)が、赤門をデザインしたものです。東京大学の赤門は、明治9年(1876年)当時東京医学校(現東京大学医学部)が下谷と泉橋通りから本郷の現在の場所に移り新しい大学と病院の運営が始まり、明治17年(1884年)、他の学部が本郷に移るまで医学部の門として使われていました。

工学系研究科・工学部



このロゴマークは、様々な分野の「知」を集積し、それが一つの社会を創り出すという「工学知」の考え方を表現、3つの丸が有機的に結びつき TECHNOLOGYのTを示しています。工学部というと何となく固い印象を受けがちですが、このロゴは、工学部という総体を上記のように表現した上で、柔らかい印象を与えるように考えられています。社会基盤学科卒業生によるデザインです。

人文社会系研究科・文学部

東大文

2010年、文学部ホームページをリニューアルする時に誕生しました。真夏のオープンキャンパスでは、教職員がロゴ入りのTシャツを着て、高校生たちを迎えました。「東大文」は東京大学文学部のエッセンスです。文学部をたったひとことで表現すれば、「文」の字に尽きるのです。文学部とは、「文学」ではなく「人文学」を学ぶところ、すなわち、人間について考えるところだというメッセージを込めています。

理学系研究科・理学部



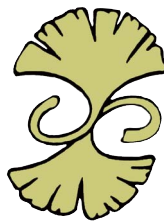
理学系研究科・理学部のロゴマークは、2007年2月、50名84件の応募作品の中から選ばれました。東大全学のロゴマークと同じ青と黄色を用い、青い部分は理学部の「リ」、黄色の部分はScienceのSを表しています。対称性の良い形状が、理学部らしさを表現しています。

総合文化研究科・教養学部



大学院総合文化研究科・教養学部では、設立50周年を記念して、新たなシンボルとして策定しました。この三枚のイチヨウのロゴデザインは、東京大学のシンボルであるイチヨウの葉を三枚重ねることにより、学部前期（教養）・後期・大学院の三層にわたる教育の融合と、世界と未来に向けた学問と人の限りない交流と創造をイメージしています。制作は（株）禅・石塚静夫氏。

薬学系研究科・薬学部



このマークは、1988(昭和63)年に薬学部が30周年を迎えた際に作成したネクタイピンからとられたもので、発案者は当時の廣部雅昭教授(現名誉教授)です。以来、薬学部の出版物などに使用されるようになり、今ではすっかり薬学部のマークとして定着しました。薬学を意味するギリシャ文字「Φ」を二枚のいちよの葉で形どり、その軸の部分の「∞」は、無限の可能性、“薬学部は永遠なり”を意味しています。

数理科学研究科



数理科学研究科のロゴは、東京大学のロゴに用いられている銀杏の葉のかたちをモチーフとして、数学における非ユークリッド幾何学にあらわれる、測地線とよばれる最短曲線によって描かれています。上の方向に伸びていくかたちは、数理科学の研究分野の広がり象徴的に表しているものです。デザインは数理科学研究科 河野俊文教授。

情報理工学系研究科



研究科の英語略称であるISTに東大の象徴である銀杏の葉を組み合わせてデザインされています。研究科の設立は2001年ですが、このロゴは2004年に制定されたものです。

情報学環・学際情報学府



このデザインは、情報学環、「Interfaculty Initiative in Information Studies」の頭文字の「I」の小文字の「i」を3つ並べたものです。人の形にも見える「i」の頭の部分が隣の「i」（人）の方にあるのは、情報学環の、異分野と結びつき、新しい「学の環」を編成するというコンセプトを表現しています。赤はホットさ、青はクールさ、黒は確かさを表現しています。

公共政策大学院(公共政策学連携研究部・教育部)



国際展開を図る上で、公共政策大学院の英語の略称が必要だと考え、これをGraSPPとしました。これにあわせて、この文字を使ってロゴマークを作ろうということになりました。デザイナーの方にはいくつか案を出してもらい、教員で議論して一番評価の高かったものを現在のロゴマークとして採用しました。

番外 キャラ編



学環・学府のロゴに絡むキメラくん

学環・学府10周年キャラクター「キメラくん」。ギリシャ神話に登場する怪物「キメラ」(Chimaira)をモチーフとして、学府修了生でもある阿部卓也さんがデザイン。真に新しい「情報の学」を作り出すために、多様な学問分野や文化的遺伝子が混ざり合い、危うい均衡の中で運動を続けることにより輪郭を維持し拡張していく。そんな学環・学府の「カオスな理念」からデザインされた、情報知の熱帯雨林に住む不可思議な生物です。

hd 東大病院 The University of Tokyo Hospital

東大病院コミュニケーションマーク

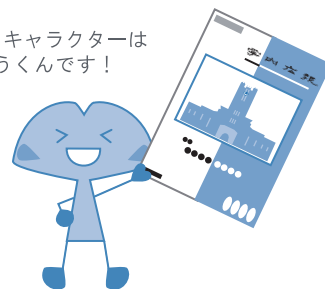
マークのなかで向き合っているのはヒューマンのhとホスピタルのh。東大病院と病気で悩む人が、しっかり向き合い座っている椅子をイメージしています。「h」と「h」の間には、東大病院の頭文字「T」も見えてきます。このマークを通して、東大病院は、病気で悩むひとりひとりと向き合い、世界最高レベルの医学・医療を提供し続けることを宣言しています。

他の学部・研究科では、現状では作成されていないようです。また、新領域創成科学研究科はロゴマーク作成中です！

東京大学ロゴ事典、いかがでしたでしょうか。シンプルなマークのなかにも、作り手のさまざまな思いや伝えたいことが込められているのがお分かりいただけただけなのではと思います。今後、研究所やセンターも取り上げられればと思っています。本特集を作成するにあたりご協力いただいた皆様、ありがとうございました！

お問い合わせ：本部広報課 (内) 22031 藤本
参考文献：「本郷の学生生活」、「学内広報 No. 909号」、「淡青 vol. 12」

学内広報のキャラクターは
いちょうくんです！



NEWS

一般ニュース



本部外部資金課

平成22年度科学研究費補助金審査委員の5名表彰される

日本学術振興会は、科学研究費補助金の配分審査に関し、平成20年度より模範となる審査意見を付した審査委員への表彰を行っており、10月29日（金）に平成22年度の表彰者一覧を発表した。

今年度は、約5,000名の第1段階審査委員の中より39名の審査員が選考され、本学からは、藤原徹教授（大学院農学生命科学研究科）、堀正敏准教授（大学院農学生命科学研究科）、飯田俊彰講師（大学院農学生命科学研究科）、園田茂人教授（大学院情報学環、東洋文化研究所）、大杉美穂准教授（医科学研究所）の5名が表彰された。

科学研究費補助金の配分審査は専門の見地から2段階で行われており、第1段書面審査はすべての審査の基盤となるもので、これらの模範となる審査意見はその後の科学研究費補助金制度の適正・公正な運営にとって重要な役割を果たしている。

本学での表彰式は、11月26日（金）松本洋一郎理事（副学長）室において執り行われ、表彰状と記念品が松本理事（副学長）より受賞者に手渡された。受賞後は審査委員としての心構えや審査時の苦労などについて、和やかに懇談が行われた。（※飯田講師については代理授与となった。）

なお、表彰された審査委員の氏名等については、日本学術振興会のホームページにて公表されている。

http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/26_hyosho/index.html



写真左から、藤原教授、堀准教授、松本理事（副学長）、園田教授、大杉准教授



地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)

第7回地球観測に関する政府間会合 (GEO) 総会および閣僚級会合が、北京で開催される

11月3日（水）～5日（金）、中国北京市、北京オリンピック会場跡近くの、中国国家コンベンションセンターにて、地球観測に関する政府間会合（GEO）の第7回総会が開かれ、小池俊雄教授（地球観測データ統融合連携研究機構、工学系研究科）が代表となり率いる日本代表団が北京入りし、GEO総会、GEO閣僚級サミットへの参加、および展示ブースでの紹介などを行った。北京サミットおよび本会合のテーマは、『統合観測、データ共有、情報共有』の三つのキーワードを柱として、GEO北京宣言文を採択した。（宣言文詳細は以下のURL参照）

http://www.earthobservations.org/meetings/meet_sum.html

平成20年10月、総合科学技術会議の下に設立された、全球地球観測にかかわる作業部会において、その議長に小池俊雄教授（工学系研究科）が就任し、全球地球観測システム（GEOSS）の構築に対し、日本政府を挙げて貢献してきた。今回、日本チーム（JAPAN-GEO）に参加した機関は、文部科学省（MEXT）をはじめ、国土地理院（GIS）、産業総合技術研究所（AIST）、宇宙航空研究開発機構（JAXA）、海洋研究開発機構（JAMSTEC）、リモートセンシング技術センター（RESTEC）、環境省（MOE）および、本学地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）の8機関である。それぞれの研究分野から、全球地球観測（GEOSS）に対する取り組みについて、合同で同じブースの中でポスターや映像などによる展示を行った。特にEDITORIAは、アジア地域の水害軽減を目指して設立された、地球観測を利用した河川および水資源管理のシステム開発、およびアジア水循環イニシアティブについて、プロモーションビデオを制作し、北京にて初公開した。このアジア水循環イニシアティブについては、GEOの中でも、アジアショーケース（模範となる例）の典型として取り上げられ、閣僚級会合でも、各国の大臣らの前でビデオが上映されるなど、大きな注目を集めた。



JAPAN-GEO チームの集合写真



JAPAN-GEO の展示ブース外観

また北京閣僚級会合には、日本政府を代表して、林久美子氏（文部科学大臣政務官）がお越しになり、各展示ブースでの展示内容を熱心に見学なされ、各機関の研究概要についての説明をお聞きになった。同政務官は閣僚級会合で述べられた声明にて、次の2点を取りわけ強調された。1点目は、人工衛星による観測。温室効果ガスを観測する衛星「いぶき」を打ちあげ、全球のCO₂濃度分布を含む観測データを公開している。陸域観測技術衛星「だいち」においても、そのデータ公開・提供について言及された。2点目は、これらの全球の観測データを統合し、解析するためのシステム開発についてであった。EDITORIAの主要プロジェクトである、「データ統合・解析システム」(DIAS)については、本年10月にデータ公開が行われており、この貴重なデータを利活用し、世界の各国と連携しつつ、水資源管理の向上や災害監視などに貢献している点が強調された。



林久美子大臣政務官（右から3人目）によるブース視察

アジア水循環に関する会合としては、平成23年3月に東京において、第5回 GEOSS アジア太平洋シンポジウムが開催される予定である。

本件に関するお問い合わせは、下記、地球観測データ統融合連携研究機構事務局までお願いいたします。

e-mail: editorial@editoria.u-tokyo.ac.jp

電話：03-5841-6132

一般

高齢社会総合研究機構

「千葉県在宅医療推進寄附プロジェクト設立記念講演会」を開催しました

高齢社会総合研究機構は11月16日（金）に工学部11号館講堂において、「千葉県在宅医療推進寄附プロジェクト設立記念講演会」を開催し、約80名の参加を得た。

これは、国の地域医療再生計画へ千葉県から提案されたものに、在宅医療・ケアの推進の部分を担当が千葉大学等と連携して担う寄附プロジェクトがこのほど立ち上がったことを記念して開かれたものである。

当機構運営委員長、機構長、それから千葉県健康福祉部井上肇理事からの挨拶の後、国立長寿医療研究センターの大島伸一総長から「在宅医療に向けての期待」と題して特別講演がなされた。そこでは、時代の変化とともに医療もその内容が変化すべきであり、病院完結型医療から地域完結型医療へ医療の変革が求められており、在宅医療・本プロジェクトへの強い期待感が示された。

その後、在宅医療推進の総合戦略と題して、当機構辻哲夫教授からプロジェクトの概要と展望、柏市木村清一保健福祉部長から柏市における在宅医療推進について、千葉大学医学部藤田信輔診療教授から千葉大学における在宅医療推進支援について、の各講演がなされた。高齢者の増加による医療需要の増大が津波のようにやってくる千葉県での在宅医療の必要性について、聴衆一同少々の衝撃をもって知ることとなった。

おわりに、前田正史理事（副学長）から、柏は本学に

とって重要な地であり、駅前キャンパス等の整備もあり、本寄附プロジェクトの進展に強い関心を持って後押ししていきたいと閉会の挨拶がなされた。



特別講演を行う大島伸一長寿医療研究センター総長



プロジェクトの概要を説明する辻哲夫教授

the Face of Tightening Financial Conditions」をテーマに、前田理事（副学長）、家所長によるスピーチ、梶田所長から研究紹介のプレゼンテーションが行われ、活発な意見交換が行われた。本会議に先立ち、カウンスル・メンバーは極超音速高エンタルピー風洞実験および国際超強磁場科学研究施設を見学した。また本会議後は、数物連携宇宙研究機構棟藤原交流広場にて研究者との交流会が催された。

本会議前日の18日（木）には、本郷キャンパスにてカウンスル・メンバーと本学学生との5つのセッションが設けられた。そのうちチョン・ウンチャン韓国国務総理による学生セッションは情報学環附属現代韓国研究センターとの共催で実施された。

次回第9回プレジデント・カウンスルは、スイス、ジュネーブにおいて2011年6月2、3日に開催される予定である。



第8回プレジデント・カウンスル本会議の様子

本部国際企画課
「第8回プレジデント・カウンスル」の開催

11月19日（金）柏キャンパスにおいて第8回プレジデント・カウンスル本会議が開催された。プレジデント・カウンスルは、本学の国際的プレゼンスの向上をめざし、そのための包括的戦略の策定と行動指針に関わる助言、ガイダンス、および支援を仰ぐため、2006年11月に総長の国際アドバイザーボードとして設置されたものである。

本会議には、タイ国チュラポーン王女殿下、チョン・ウンチャン氏、ナラヤナ・ムルティ氏、フレデリック・ヒルマー氏、ハッサン・ジャミール氏、小宮山宏氏、カリレイビオ氏、横山禎徳氏、吉野洋太郎氏、および本学から濱田純一総長、前田正史理事（副学長）、田中明彦理事（副学長）、江川雅子理事、磯部雅彦副学長、物性研究所家泰弘所長、宇宙線研究所梶田隆章所長が出席し、「University Finance - Funding Advanced Research in



数物連携宇宙研究機構棟にて交流会



本部留学生・外国人研究者支援課

平成 22 年度第 2 回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催される

教職員ならびに卒業生の方々からの寄附金で運用されている「外国人留学生支援基金」は、平成 22 年度第 2 回奨学生（奨学金月額 5 万円／支給期間：平成 22 年 10 月～平成 23 年 3 月）として 10 名の留学生を採用し、11 月 26 日（金）に奨学生証書授与式を開催した。



謝辞を述べる宋 駿嵬さん

式は、田中明彦理事・副学長（留学生支援基金運営委員会委員長）及び小島憲道理事・副学長（同委員会副委員長）の臨席の下、田中理事・副学長から奨学生に証書が授与され、「本奨学金は教職員、卒業生の方々からの寄附金から支給されるものである。優秀な留学生の皆さんには、研究・勉学の成果を期待している」との挨拶があった後、奨学生を代表して大学院工学系研究科博士課程の宋 駿嵬さん（中国）から、「多くの方に支援されて勉学に打ち込める環境を整えて頂けたことを心から感謝いたします。そして、この大切な支援基金奨学金を大事に使って、より勉強と研究に集中して、研究成果で貴基金の恩恵に報いるつもりです」との謝辞が述べられた。

なお、本奨学金受給者は、前身の外国人留学生後援会から通算して今回で 330 名となった。ここに本基金の趣旨にご賛同いただいている皆様のご支援に対し、改めて御礼申し上げる次第である。



東京大学外国人留学生支援基金平成 22 年度第 2 回奨学生一同



学生相談ネットワーク本部

講演会「発達障害と共に生きる」を開催

11 月 30 日（火）、学生相談ネットワーク本部主催講演会「発達障害と共に生きる」が小柴ホールにて開催され、会場を埋めつくす 200 名を超える来場者があった。

学生相談ネットワーク本部では、10 月 1 日に、「コミュニケーション・サポートルーム」を開設した。ここは、学生の皆さんが自分自身のコミュニケーション能力に関する悩み、注意力の問題、他の人と違う考え方・感じ方に関する悩みなどについて相談する窓口であり、その開設記念として本講演会を開催した。

古田元夫学生相談ネットワーク本部長の開会の挨拶、小島憲道理事（副学長）による挨拶に続き、発達障害支援に精力的に活動されている本学名誉教授であり、昭和大学烏山病院長の加藤進昌先生と、本学卒業生で当事者でもある片岡聡氏から貴重なお話をうかがった。その後、自分らしい生き方、人間関係のあり方などについてディスカッションがあり、大きなテーマで悩む青年期をどのように理解すればよいのかを会場の学生、教職員、保護者と共に考える講演会になった。



加藤 進昌氏の講演



片岡 聡氏の講演



ディスカッション風景

地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)

「データ統合・解析システム」(DIAS)

終了時評価報告会を開催しました



「データ統合・解析システム」(DIAS) ロゴ

12月3日(金)9時30分～18時、本学駒場Ⅱリサーチキャンパスの生産技術研究所 An 棟2階コンベンションホールにおいて、国家基幹技術－海洋地球観測探査システム－「データ統合・解析システム」(DIAS)の終了時評価報告会が、地球観測データ統融合連携研究機構(EDITORIA)主催により開催された。

「データ統合・解析システム」は、文部科学省研究開発局からの委託により、第三期科学技術基本計画の中で、国家基幹技術－海洋地球観測探査システム－の一翼を担う研究として位置づけられ、平成18年10月に、5年間のプロジェクトとしてスタートした。平成22年度

は、その研究期間の最終年度に当たっており、プロジェクトの終了時評価報告として、各課題研究の過去五年間の成果発表を行い、当報告会に出席した研究開発推進委員、および企業・一般からの参加者とともに議論し、今後の方向性を見定めていく機会を得た。

会議の冒頭では、本学生産技術研究所の野城智也所長、文部科学省大臣官房審議官の加藤善一氏、海洋研究開発機構横浜研究所の今村努所長が、それぞれ開会のご挨拶を述べられた。



ご挨拶をされる加藤善一氏(文部科学省大臣官房審議官)

会議の構成は、大きく二つのセッションに分かれており、午前中から午後の前半にかけて、「データ統合・解析システム」が蓄積してきた統合・融合データを活用して、社会に役立つ新たな情報の創出を目指してきた、12の利用研究分野からの課題報告があった。各課題代表者、発表タイトル、研究成果の詳細については、下記のURLより発表資料をご参照いただきたい。

<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/dias/symposium/3-8.html>

午後のセッション後半部分では、「データ統合・解析システム」統融合コアシステム開発、相互利用性システム開発、実用化技術開発、地球観測データ投入、の各課題から、データ統合のシステム基盤開発等について現状報告があった。

また会議終盤では、次の四名のDIAS研究開発推進委員の先生方から、それぞれ終了時評価として、コメントをいただいた。簡略して以下にご紹介する。

◎科学技術学術審議会の瀧澤美奈子臨時委員のコメント：DIASでの水循環観測研究が、アジアやアフリカの水問題を解決するような成果を上げていることに対して、日本が科学技術の分野で世界に貢献できるというのが素晴らしいと思います。それに尽きると思います。

◎北海道大学の若土正暁名誉教授のコメント：今まで夢でしか考えられなかった、異分野の人たちと連携していくということが可能になってきた。形だけの学際ではなく、本当の意味でのリンク、本当のクロスオーバーな研究の中から、新しい学問が作られるのではないかと思います。大いに期待しています。

◎海洋研究開発機構の和田英太郎特任首席研究員のコメント：フィールドサイエンスのパラダイムシフトを作ったという点で、DIAS プロジェクトは成功したと思います。DIAS が目指した方向は、社会的意義も大変大きいと思います。

◎本学の浅井富雄名誉教授のコメント：地球環境という、非常に多分野の、膨大な、長期的で、広域的な観測データを効果的に使えるようなデータセンターの機能を構築していく、そういう仕事が、今後の重要な課題になるのではないかと思います。

最後に、DIAS プロジェクト代表、小池俊雄教授が、閉会の挨拶に代えて次のように締めくくった。「地球環境データの新たな利用のしかたを考え、夢のような分野連携、夢のようなパラダイムシフト、ダイナミックなデータ統融合を実現できる組織づくりを目指して、日本の科学技術の世界への貢献として役立つような枠組みを考えていきたいと思います。」

プロジェクトの終了は、3月末日ですが、これまでの5年間の成果を広く一般の方々にも公開することを目的に、初夏のころに本学にて、もういちど、DIAS フォーラムを開催する予定です。皆さまのお越しをお待ちしています。学内広報にも5年間にわたり、わたしどもの投稿記事を掲載していただきました。お読みいただきました皆様、誠にありがとうございました。

本件についてのお問い合わせは、地球観測データ統融合連携研究機構事務局までお願いします。

03-5841-6132

editoira@editoria.u-tokyo.ac.jp

本部学務課

平成22年度教育実習・介護等体験 報告会及び懇談会を開催

一般

12月3日（金）16時30分から法文2号館教員談話室において、教育実習・介護等体験報告会が、その終了後、18時から山上会館に場所を移して教育実習・介護等体験懇談会が、教育運営委員会教職課程部会の主催で、教育学研究科・教育学部が取りまとめ部局となり開催された。また、昨年度までは懇談会の中で学生からの報告の場を設けていたが、今年度は開催方法を工夫し、報告会を単独で開催した後、懇談会とジョイントさせる形で行うこととした。

教育実習・介護等体験報告会では、今年度教育実習や介護等体験に参加した学部及び大学院の6名の学生から報告が行われた。

学生からは、学校現場で働く先生方の苦勞が身にしみてわかった、福祉施設で故郷の踊りを披露したらお年寄りに喜んでもらった等の報告があった。深く実感したことやエピソードを自分の言葉で誠実に語る姿が印象的で

あった。学生の報告を傾聴した教職員からは、時折笑い声も漏れ聞こえるなか、暖かな励ましの言葉や素晴らしい報告であったとの評価が寄せられた。最後に今井康雄教育学部附属中等教育学校校長の、今後の進路等に役立つ貴重な経験である、との講評コメントをもって和やかに終了となった。



報告会で教職員からの質問に答える学生たち

その後、山上会館で開催された教育実習・介護等体験懇談会は、武藤芳照教育学部長の御礼と開会の挨拶に続き、佐藤慎一理事（副学長）による挨拶と乾杯の発声で始まった。前田正史理事（副学長）をはじめ、関係教職員、学生、教育実習の全般に協力した教育学部附属中等教育学校の教諭陣や、介護等体験でお世話になった社会福祉施設の関係者等にもご出席いただき、80名を超える出席者となった。



御礼と開会の挨拶を述べる武藤芳照教育学部長（左）
大学を代表して挨拶を述べる佐藤慎一理事（副学長）（右）

しばらくの懇談後、教育学部附属中等教育学校を代表して石橋太加志教諭から、教育実習生を受け入れた感想等が述べられ、続いて、多摩済生園・多摩済生ケアセンターの井上和男施設長からは、東大生に対する感想や期待の言葉とともに、本学への貴重なご意見もいただいた。懇談会が終始和やかな雰囲気で行進中、お世話になった関係者に御礼やこれからの抱負を熱心に述べる学生の姿も見受けられた。

最後に、例年最も多くの学生が教育実習や介護等体験に参加している文学部を代表し、小松久男文学部長からの締め括りのコメントがあり、盛況のうちに閉会した。



感想を述べる石橋太加志附属中等教育学校教諭（左）
東大生への期待を述べる井上和男施設長（右）

本部学生支援課
第57回総長杯争奪水上運動会が開催される



12月4日（土）、埼玉県戸田オリンピックポートコースにおいて、恒例の運動会行事「総長杯争奪水上運動会」が開催された。

本大会は本学関係者によるボートレース大会で、競技経験に関わりなく楽しめる総長杯のスポーツイベントとして、またボートレースを体験する数少ない機会として例年好評を博している。学生や教職員ら総勢152名が参加し、天候にも恵まれ盛会となった。

メインレース【レガッタの部】は「ナックルフォア」と呼ばれる4人漕ぎの艇を用い、250mレース2回の合計タイムを競うものである。参加者は4人1チームで漕ぎ手（クルー）となり、各チームに漕艇部員がコックス（舵取り）として加わって、大会を通じて丁寧に指導することになっている。競技に使用するボートは公園ボートと違い、脚を主体に体全体を使って漕ぐもので、多くの参加者にとっては経験のない動きではあったが、どの艇もすぐに上達し、4人が一丸となった迫力あるレース展開を見せた。若手職員チーム、「きのこオムレット」が2大会連続となる優勝を遂げ、再び総長杯を手にした。

メインレース【レガッタの部】のほか、陸上では「エルゴメーター」というボートのトレーニングマシンを用いたチームリレーが行われ、会場は始終歓声が絶えなかった。

レース後、東京大学戸田橋艇庫にて催された懇親会では、おでんや蕎麦稲荷（すし飯の代わりに蕎麦を詰めた稲荷）が振舞われ、初参加の学生や、大会リピーターの卒業生や教職員らが親睦を深めた。

本大会の結果は以下のとおりである。

【レガッタの部】 < 東京大学総長杯 >

順位	チーム名	タイム	ハンデ	換算タイム
1	きのこオムレット	2分35.19秒	-6	2分29.19秒
2	イケメソチーム	2分51.55秒	-12	2分39.55秒
3	TMC	2分50.22秒	-6	2分44.22秒
4	TKO48	2分47.68秒	0	2分47.68秒
5	木質パネリーズ	2分49.22秒	0	2分49.22秒

※ 250mのタイムトライアル2回の合計

※ 順位決定の際、経験者は一人につき+12秒、女性は一人につき-6秒、50歳以上は一人につき-3秒で計算されます

【エルゴメーターの部】

順位	チーム名	タイム
1	korea all-star	2分40.00秒
2	森の屍	2分42.10秒
3	naki(なくる)	2分43.50秒
4	Theブルガリア	2分43.50秒
5	NO WORK I	2分46.00秒

※ 4人チームで男子200m、女子150mのチームリレー。



コックス（舵取り）によるレクチャー



レースの様子



エルゴメーターで進行距離を測定



総括プロジェクト機構

「日本の航空の明日を考える～日本の航空100年記念フォーラム～」開催

12月7日（火）、安田講堂において、航空イノベーション総括寄附講座（以下CAIR）、航空イノベーション研究会、及び政策ビジョン研究センターの共催により、「日本の航空の明日を考える～日本の航空100年記念フォーラム～」が開催された。本年は、日本で最初の動力飛行からちょうど100年目に当たり、この節目の年に、これまでの日本の航空の歴史を振り返るとともに、今後の航空が抱える課題とそれへの提言について、特に国内航空ネットワークの維持・活性化に焦点を当てて議論することを目的に本フォーラムは開催され、当日は、400名近い参加があった。

冒頭、松本洋一郎理事（副学長）より、羽田空港の再拡張・再国際化やMRJの開発など、転換期にあるわが国の航空のさらなる発展に期待する旨の挨拶があった後、世界航空学会会長のテ・オーム教授（カナダ ブリティッシュコロンビア大学）より世界の航空の発展について基調講演があった。基調講演では、オープンスカイ政策の経済的合理性を強調した上で、将来的には北東アジアで段階的にオープンスカイブロックを目指すべきであり、東京は少なくとも2つのハブ空港が必要等の提言がなされた。

続いて、日本航空協会の酒井正子氏より、「日本の航空100年を振り返る」と題して、これまでの航空政策の経緯を説明するとともに、首都圏空港の容量拡大を機に、航空機の小型化促進に舵を切るべきとの講演があった。

三菱航空機株式会社の戸田信雄氏より、リージョナルジェット機の市場動向や現在開発中のMRJの環境性能等について説明がなされ、リージョナルジェット機の将来展望が示された。また、国土交通省航空局の篠原康弘氏より、現在日本の航空が直面している課題とそれへの政府の対応として、成長戦略会議の内容を中心に説明があった。

後半は、CAIRの岡野まさ子特任准教授より、地域航空維持のための各国の支援制度や新たな取り組みについて説明があり、その後、CAIR代表の鈴木真二教授（工学系研究科航空宇宙工学専攻）がコーディネーターとなってパネルディスカッションが開催された。パネルディスカッションには、石川県の浅井俊隆氏、全日本空輸の阿部信一氏、フジドリームエアラインズの内山拓郎氏、三菱商事の宍戸昌憲氏、公共政策大学院の日原勝也特任教授、CAIRの岡野特任准教授が参加し、能登空港における搭乗率保証制度や北九州のエアQ構想等、地域航空の維持・活性化のための取り組みやリージョナルジェットの可能性について紹介された。また、不採算路線であっても政策的に維持すべきかどうか、地域航空を維持・活性化させるためにはどのような仕組みや取り組みが必要かについて活発な議論・提言がなされた。パネ

ルディスカッションの最後には、鈴木教授より、国民が平等に高速輸送手段を確保できるよう、高速交通システムのグランドデザインを描いたうえで、自治体と運航者との協働、公租公課の引き下げや機材・整備費等の共有化による運航費削減、また、リージョナルジェットによる航空ネットワークの再構築と近距離アジアとのネットワーク拡充等の取り組みが求められるとの総括がなされた。

最後に、政策ビジョン研究センターシニア・フェローの森田朗教授（法学政治学研究科）より、総合大学としての本学の強みを生かした研究・教育活動及び情報発信を通じて航空の発展に貢献していきたいとの挨拶があり、閉会となった。



主催 東京大学航空イノベーション研究会 東京大学航空イノベーション総括寄附講座 東京大学政策ビジョン研究センター
後援 国土交通省（財）日本航空協会（社）日本航空技術工業会 全国機材建設システム推進協議会

日本の航空100年記念フォーラムのポスター

CAIRでは今後も航空の諸課題に焦点をあてたシンポジウム等を開催することとしております。詳細は <http://aviation.u-tokyo.ac.jp/> をご覧ください。



海洋アライアンス

中学生を対象にしたミニ講義を行う

12月8日（水）、海洋アライアンス（機構長 浦環生産技術研究所教授）は山口県の慶進中学校・高等学校（縄田研吾校長）の中学生70名の訪問を受け、ミニ講義とパネルディスカッションを行った。

慶進中学校・高等学校は私立の中高一貫教育校で、修学旅行では本校を訪れることを恒例としている。昨年までは、同郷のよしみで農学生命科学研究科の空閑教授が応対していたが、昨年3月に退職されたことから、海洋アライアンスが引き継ぐ形となった。

今回応対したのは、山口県出身である工学系研究科の岡屋克則助教、昨年に出前授業で同校を訪問した海洋ア

ライアンスの福島朋彦特任准教授、同じく海洋ライアンスの安澤美合事務補佐員、そして昨年3月に同校を卒業した教養学部1年の河杉翔伍君の5名である。

中学生たちを乗せたバスが正門に到着すると、早速、ミニキャンパスツアーが始まった。恩師との再会を果たした河杉君がガイドを務め、いちよう並木、安田講堂、三四郎池、そして小柴特別栄誉教授のノーベル賞メダルが飾られている理学部1号館を案内した。

続いて行われた岡屋助教によるミニ講義の会場は旧理学部1号館(150号室)である。生徒たちは、初めてみる大学の講義室の雰囲気戸惑いながらも目を輝かせていた。講師は、自らの研究を紹介するとともに、同郷の後輩たちに対する次のような温かいメッセージを送った。

- ・興味のあることはとことんやってみよう！
- ・夢を持とう！
- ・世界へ出かけよう！
- ・周囲に惑わされず、自分の感覚を大切に！

次に、福島特任准教授が司会を務め、岡屋助教、河杉君の3人によるパネルディスカッションが行われた。



パネルディスカッション風景

最初は緊張していた生徒達であったが、終盤になるとバスの時間を気にする司会者の心配をよそに、質問が相次ぐようになった。岡屋助教の体験に基づく興味深いアドバイス、河杉君の飾りのないユーモアに富んだコメントに生徒達は感心し、同郷の先輩方の話を心に刻んでいるようであった。

そして最後は生徒代表によるお礼の言葉で締めくくられた。

数日後、生徒たちを引率した加治英雄教諭から、本学の温かい応対に感謝するとともに、河杉君の元気な姿が嬉しかったとの連絡があった。また、岡屋助教と福島特任准教授には生徒全員からの感謝の手紙が束となって届けられた。



中学生との集合写真

本件は、10月に海洋ライアンス内に発足した海洋リテラシープログラム(プログラム長 浦辺徹郎理学系研究科教授)の下に設置された海洋リテラシー研究グループ(グループ長 黒倉壽農学生命科学研究科教授)による研究活動の一環として実施したものである。

同グループは、海のない地域の子供たちに海の面白さを伝える手段を検討するため、地方の中学生の意見を集めている。早くアンケート調査に協力してくれた慶進中学の生徒たちの声は貴重な検討材料となる。

海洋ライアンスホームページ：

<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>

一般

国際化推進学部入試担当室

「国際化推進学部入試担当室開室記念式典」開催

12月13日(月)16時から、駒場Iキャンパスアドミニストレーション棟3階学際交流ホールにおいて、国際化推進学部入試担当室開室記念式典が開催された。記念式典には、濱田純一総長をはじめ、役員、部局長、本部課長、事務(部)長等の学内関係教職員約100名が出席した。

第1部の講演会では、内野儀国際化推進学部入試担当室長から同室が設置された経緯の説明があった後、矢口祐人同室副室長からAO入試に関するこれまでの調査結果が報告された。その後、活発な質疑応答が行われ、予定時間をこえて、有意義な講演会となった。

第1部の講演会終了後、第2部の懇談会までの間、濱田総長は102号館に設置された国際化推進学部入試担当室を視察した。

懇談会では、内野室長から開会の辞が述べられ、濱田総長、田中明彦理事(副学長)、山影進総合文化研究科長から挨拶があった。続いて、小島憲道理事(副学長)の発声で乾杯となり、懇談会が開始された。懇談会は、和やかな雰囲気の中にも、参加した関係者から、今後の同室の活動内容や国外からの優秀な学生を積極的に受け入れるための制度設計などについて、熱心な意見交換が行わ

れた。最後に、江川雅子理事から挨拶があり、矢口副室長の閉会の辞で散会した。



AO入試に関する調査報告を行う矢口副室長



挨拶をする濱田総長



乾杯をする小島理事（副学長）



本部学務課

「学生支援センター」の館銘板設置

学生等へのサービス向上を目的として本郷キャンパス御殿下記念館モール階に整備した「学生支援センター」の館銘板が12月16日（木）に上掲された。

上掲された館銘板は、農学生命科学研究科の協力を得て千葉演習林から伐り出した樺の板に、濱田総長直筆の文字を投写したものである。



— 上掲した館銘板 —
左から小島理事（副学長）、濱田総長、佐藤理事（副学長）

新たに整備された建物は、地下1階、地上3階建て、併せてバリアフリー対応型のスロープ、エレベーター、多目的トイレが設置されている。

また、学生が自由に休憩・休息がとれるスペース、日本人学生と留学生が交流を図れるスペース、運動部・サークル等の学生団体が会議を行うなどのスペースとして、「学生用ラウンジ」、「学生用ギャラリー」及び「学生用ディスカッションルーム」が備えられている。

各種届出等の利便性が向上しただけにとどまらず、学生交流スペースが拡充された他、地下1階の「学生ギャラリー」には、学生団体が撮影した写真や制作した作品が展示され、また、3階のテラスからは、御殿下グラウンドを一望できるなど、絶好のロケーションで、学生間の交流が促進されることが期待されている。

学生の皆さんには、是非とも芸術作品の観覧や交流をはかるために利用していただきたい。

ディスカッションルーム等の利用方法は、本部学生支援課（内線22512～22514）までお問い合わせください。

「学生支援センター」の場所及び移転・集約された学生及び外国人研究者等を支援する窓口・事務室は次のとおりである。

1. 「学生支援センター」（場所：本郷キャンパス御殿下記念館北側）



位置図



外観

2. 移転・新設した施設等

地下1階	課外活動支援窓口	本部学生支援課 (学生生活チーム・体育チーム)	第二食堂建 物2階から 移転
	バリアフリー支援 窓口	バリアフリー支 援室本郷支所	理学部旧1 号館1階か ら移転
学生用ギャラリー			
1階	奨学金・授業料等 免除・学生宿舎・ アルバイト窓口	本部奨学厚生課 (奨学チーム・厚 生チーム)	安田講堂北 側1・2階 から移転
	学生用ラウンジ		
2階	留学生・外国人研 究者支援窓口	本部留学生・外 国人研究者支援 課(企画チーム・ 生活支援チーム)	第二本部棟 1階から移 転
	国際センター相談室サポートデスク(本郷オフィス)		
3階	学生用ディスカッションルーム1・2		

本部総務課 2010年度業務改善総長賞表彰式の 開催

12月17日(金)、安田講堂において、2010年度業務改善総長賞表彰式が業務改善プロジェクト推進本部の主催で開催された。

業務改善プロジェクト推進本部では今年度も業務改善の募集を行い、31件の応募があった。表彰式では、応募課題の中から厳正な審査の結果選出された総長賞(国内研修)1件、理事賞1件、特別賞1件に対し、濱田純一総長及び久保公人理事から表彰状・副賞が授与された。



総長から表彰状を受け取る受賞者

○総長賞(国内研修)

「契約審査案件のシステム管理」
契約審査効率化WG(代表者:峯崎 裕)

○理事賞(自己研鑽費用補助)

「自作貸出装置による平日夜間および土・日曜日の図書貸出サービスの実現」
物性研究所図書室(代表者:根岸 正己)

○特別賞(コミュニケーションセンター商品)

「学内資金の有効活用」
財務部財務課(代表者:田畑 磨)

表彰に引き続き、受賞者による取組課題プレゼンテーションが行われた。業務改善の着眼点や実際の課題解決の経過、意気込みや熱意が伝わり、来年度に向けての取り組みが期待される内容であった。



受賞者によるプレゼンテーションの様子

※以下 URL にて、プレゼンテーション資料をご覧ください
 だけです。

<http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/業務改善総長賞受賞課題の一覧>

(東大ポータル>便利帳>総務部>総務課>業務改善総長賞受賞課題の一覧)

続いて、濱田総長が職員への講話を行った。

これまでの業務改善の成果を高く評価するとともに、今後も、個々の自律改善と併せて、長期的・組織的な規模での業務改善をすすめていきたいと語られた。また、今後の課題について、意識改革と組織・制度の見直しを挙げられ、「日々の工夫の実践、スマートな働き方、気働き、をしっかりと考えて仕事に取り組むことが、成果を生むと同時に自分自身の能力をつけていくきっかけになる。また、決して無駄ではない仕事でも優先順位をつけて、低いものについては切り捨てるという議論もしていく必要がある。今後、そういう観点からも提案いただきたい。」と、次の展開に向けたメッセージが送られた。

なお、当日は約 400 名の教職員が参加し、表彰式とともに祝った。



受賞者一同。総長を囲んで記念撮影

本部企画課
 「行動シナリオ」と「職員アンケート」
 の説明会、開催される
 一般

12月17日(金)に安田講堂で業務改善総長賞の表彰式に引き続き、11時から濱田純一総長と久保公人理事による職員向けの説明会が行われた。まず濱田総長から「東京大学の行動シナリオ FOREST2015」の説明があり、次に久保理事から「職員アンケートの調査結果の紹介」が行われ、最後に表彰式から引き続き参加した約400名との間で意見交換が行われた。

濱田総長の「行動シナリオ」の説明では、「森を動かす。世界を担う知の拠点へ」という総長就任時の所信が改めて紹介され、将来を見据え、東京大学の新しい基礎を創り上げる決意が語られた。そしてそのために今後4年余に渡って「行動シナリオ」を遂行していくことの重要性が述べられた。

総長の説明に続き、8月25日から9月15日の間に常勤の職員を対象に実施した職員アンケートの集計結果について、久保理事が紹介を行った。アンケートの結果、事務組織についてのこれまでの改革の取組みが着実に実施されていることが確認できた一方で、現在の事務組織が抱えている課題が浮き彫りにされたことが述べられた。こうした課題を、今後、「事務職員等の人事・組織・業務の改善プラン」の見直しや、「行動シナリオ」の重点テーマに掲げられている「プロフェッショナルとしての職員の養成」の推進を行う際のヒントとする、と説明があった。

総長と理事の説明の後の質疑応答の時間では、「プロフェッショナルな職員を養成するために職員の評価や育成をどのように改善すればよいか」、「厳しい予算の中で、どのように学生サービスを充実させていけばよいか」等の意見交換が行われた。総長自らがマイクを持ち発言者を指名するなど、大学の講義を想起させる場面もあった。



参加者と対話をする濱田総長と久保理事



12月20日（月）、安田講堂にて日本学術会議、朝日新聞社、本学の主催により、シンポジウム「大学教育と職業との接続を考える」の第2回「大学教育と産業社会の関係について考える」が開催された。第1回目は11月22日（月）に「大学生の就職をめぐる諸問題と当面の打開策」と題して行われた。

開会にあたり、坂本弘子 朝日新聞社社長室教育事業センター長の挨拶の後、コーディネーターの本田由紀 本学大学院教育学研究科教授から、第1回シンポジウムでの議論の総括と第2回の趣旨説明が行われた。続いて、北原和夫 国際基督教大学教養学部教授（日本学術会議大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会委員長）、北森武彦 本学大学院工学系研究科長・工学部長、井上洋 日本経団連社会広報本部長、前原金一 経済同友会副代表幹事・専務理事、広井良典 千葉大学法経学部教授による講演が行われた。後半は、もう一人のコーディネーターである山上浩二郎 朝日新聞社編集委員が前半の講演内容を総括し、パネルディスカッションがスタートした。前半の講演者であった北森武彦 本学教授、広井良典 千葉大教授、前原金一氏に、居神浩 神戸国際大学経済学部教授、大久保秀夫 フォーバル会長・東京商工会議所特別顧問を加えた5名のメンバーにより、前半の講演で提起された問題点等を中心に熱心な議論が展開された。最後に、2回のシンポジウム全体を総括して、北原和夫国際基督教大学教授から、大学、企業、関係機関・団体に対して、改善に向けた取り組みが提案され、小島憲道理事（副学長）の挨拶によって2回にわたるシンポジウムが締めくくられた。

当日は、大学関係者のほか、経済界、企業等の幅広い分野から約450名が参加し、関心の高さがうかがえた。

第1回と第2回のシンポジウムを通じて、立場の違いから論点によっては議論が対立する場面はあったものの、幅広い分野からそれぞれが真剣に議論を聞かせたことで、参加者は行き詰っている現状について認識を共有できた。また、議論の内容が打開策への糸口となったことが期待でき、解決のための道筋に向けて示唆に富む内容となった。政府もこの問題に重大な関心を寄せ、様々な対策を講じているところであり、時宜を得た有意義なシンポジウムとなった。



講演を行う北森武彦 大学院工学系研究科長・工学部長



熱心に議論するパネリストと2名のコーディネーター



閉会の挨拶の小島憲道理事（副学長）



海洋アライアンス

海洋リテラシープログラム「海洋教育促進研究センター（日本財団）プログラム」発足 調印式・記者会見

本学と日本財団は、海洋教育の推進をうたった「海洋基本法」に対応した、初等・中等教育における海洋教育普及推進に関する研究事業を行うため、海洋アライアンス（浦環 機構長）の「海洋リテラシープログラム」（プログラム長：浦辺徹 理学系研究科教授）の下に、10月1日付けで「海洋教育促進研究センター（日本財団）プログラム」（以下「センター」と言う。）（センター長：佐藤学 教育学研究科教授）を発足させた。

12月20日（月）、濱田純一総長、日本財団笹川陽平会長を迎えて、本部棟12階会議室において、センター発足にかかる調印式及び記者会見が行われた。



合意書を取り交わす濱田総長と日本財団笹川会長

センターには、海洋教育政策学ユニット（ユニット長：佐藤学 教育学研究科教授）、海洋人材育成学ユニット（ユニット長：赤坂甲治 理学系研究科教授）、の二つのユニットに4名の特任教員が配置され、教育学・教育政策学と、学際的海洋学とが融合した体制となっている。

センターは、全国の大学、小・中・高等学校等と連携し、海洋教育の普及推進に関わる研究と実践のハブ拠点として、初等・中等教育レベルにおいて海洋教育を普及推進することを目的とする国内最大規模のプログラムであり、学際的教育素材の研究と開発を行うと共に、学生・大学院生の参画を通して、海洋教育人材育成を図ることを目的としている。

さらに次の学習指導要領改正に向けて、海洋教育の重要性を行政に提言していくことを計画している。

海洋アライアンスホームページ
<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>



本部研究推進課

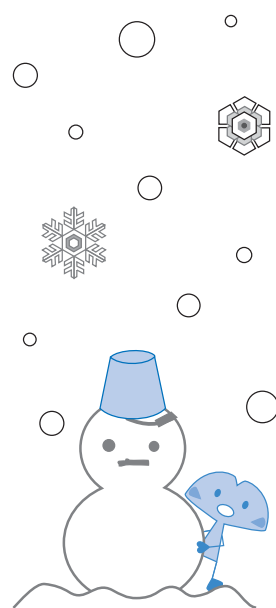
柏市と連携協力に関する協定を締結

12月21日（火）、本学は千葉県柏市との間に連携協力に関する協定を締結した。柏市とは従前から様々な形で連携協力を行ってきているが、本協定は学術研究、人材の育成及び地域社会への貢献を目的として締結されたものである。今後は柏キャンパスの部局等をはじめ、これまで以上に本学と柏市との連携協力をより一層進めていくこととしている。

なお、本協定の署名には、本学からは濱田純一総長、松本洋一郎理事（副学長）、難波成任総長特任補佐、大和裕幸新領域創成科学研究科長、保坂寛同研究科教授が、柏市からは秋山浩保市長、猿渡企画部長、吉川企画調整課長が出席した。



濱田純一総長（前列中央左）と秋山浩保柏市長（前列中央右）



部局 ニュース



大学院理学系研究科・理学部

留学生見学旅行、実施される



部局

7月3日（土）から4日（日）にかけて、大学院理学系研究科・理学部では留学生の見学旅行を実施した。今年は1泊2日で奥州平泉への旅行を企画し、留学生15名と国際交流室のスタッフ3名の計18名が参加した。

1日目は9時過ぎの東北新幹線で東京駅を出発し、一関へ向かった。東北本線に乗り換え平泉に到着後は、レンタサイクルを借り市内観光へ。北上川に面した丘陵にあり源義経公終焉の地と伝えられる高館義経堂や、中尊寺金色堂等の平泉周辺の名所・旧跡を見学した。夜は宿で夕食を頂いたのち、学生同士の交流を深めるために賞品をかけゲームを行った。普段、研究室や専攻が違う留学生と仲良くなる機会が意外に無いということで、皆非常に盛り上がっていたのが印象的であった。

2日目はまず午前日本三大溪の一つである狛鼻溪で船下りをした。暑い盛りで日差しがきつのが難点ではあったが、船先を泳ぐ川魚がはっきり見える程澄んだ水と、兩岸の美しい緑に囲まれた風光明媚な溪谷を、熟練の船頭さんの軽妙なトークとともに満喫した。午後からは東山和紙で紙すき体験に挑戦。手漉きの和紙を様々な色で染めたり、草花を入れたりと思いつきの模様を作りながら楽しんだ。その後は三億五千万年前の地歴を誇るという鍾乳洞、幽玄洞を見学。内部には日本で初めて岩盤上で発見されたウミユリの萼や三葉虫、古代サンゴの化石等が見られ、太古の昔が偲ばれた。また洞窟の中はかなり気温が低く、涼をとるには格好の場所であった。

この旅行中何人かの学生から、研究で忙しく日本滞在中ほとんど旅行に行く時間が無いという話を聞いた。せっかく縁あって日本に留学に来たのだから、研究に打ち込むのはもちろんのこと、日本という国に対する見聞を少しでも深めてほしいし、できるだけそうした機会を提供したいと感じた。学生からは楽しかった、また来年も参加したいという感想が多く寄せられ、日本文化の見学や親睦を深めるという点からも有意義な時間を過ごせたのではないかとと思う。



みんなでハイ、チーズ！



狛鼻溪船下り

大学院農学生命科学研究科・農学部 公開講座「ペレット・薪利用で創る癒しの森」

大学院農学生命科学研究科附属演習林・富士演習林(山梨県山中湖村)では、保健休養機能の高い森林を提供する技術的課題もさることながら、最近では、地域全体で保健休養機能に優れた森林空間をいかに実現するかという政策的課題に取り組み始めている。その新たな試みとして、国土緑化推進機構「緑の水の森林基金」による助成と山中湖村の協賛を得て、9月12日(日)山中湖村在住者を対象として公開講座「ペレット・薪利用で創る癒しの森」を開催した。ペレットとは、木材を破碎して粒状に成形した燃料を言う。

森林を手入れする際に出る木材が燃料などの形で使われれば、森林整備の助けとなる。それを村内の森林所有者と薪・ペレットストーブに興味を持つ別荘住民に知ってもらうことは、地域の燃材需要と森林整備を結ぶ第一歩になるとの考えから、この公開講座が企画された。

当日は、旧来の村民として9人、別荘地から15人、村役場から3人の参加があった。午前中は、演習林内を散策しながら、長年放置した森林と定期的に手入れをしている森林の景観の違いを確認した後、間伐作業を実演

した。間伐した木を燃料として利用するために、楽に搬出できることは重要な要件である。ロープウィンチという、軽量かつ安全な機器を紹介し、参加者にもこの機器による木材搬出を体験してもらった。

引きだした丸太は、薪に適したサイズに切ってペレット製造会場に運んだ。そこでは、薪割り→一次破碎→乾燥→二次破碎→成形というペレット製造の一連の過程を見学してもらった。参加者には、各種道具を使った薪割りも体験してもらった。

昼食時は、山中寮内藤セミナーハウスの中庭にペレットや薪を燃料とする燃焼機器が各種並び、燃焼実演を兼ねて昼食が調理された。参加者の皆さんは、目の前で作られた焼きトウモロコシ、ローストポーク、蒸し焼き野菜、スープ、パンなどを片手に、興味深げに燃焼機器について質問していた。

午後は、意見交換会「癒しの森の夢を語る」として、齋藤助教と新潟の実践家から話題提供があった後、参加者との活発な意見交換が行われた。



ロープウィンチでの木材搬出を体験する参加者



絶品の料理も森が与えてくれる癒しの一つ

柏キャンパス・リエゾン室
柏キャンパス 10周年記念一般講演会

10月16日(土)に、柏キャンパスがこの地に設立されて10周年になるのを記念して、一般講演会が開催された。この講演会は東京大学柏キャンパス共同学術経営委員会が主催で、柏市が共催となり、柏キャンパスに隣接するさわやかちば県民プラザホールで行われた。

柏キャンパス共同学術経営委員会委員長の梶田隆章教授(宇宙線研究所長)、柏市長の秋山浩保氏の挨拶に引き続き、基調講演として大学院新領域創成科学研究科長の大和裕幸教授より「柏キャンパスの過去、現在、未来」と題した講演があった。その後、物性研究所の嶽山正二郎教授より「ズドンと一発、世界一の強磁場発生と物性物理」と題した講演があった。次に、大学院新領域創成科学研究科の三谷啓志教授より「メダカが拓く科学の新領域ゲノム多様性から宇宙生物医学まで」と題した講演があり、最後に特別講演として独立行政法人宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所の川口淳一郎教授より「はやぶさが挑んだ往復の宇宙飛行とカプセルの帰還、その飛行の歩み」と題した講演があった。

来場者は、地域の方々を中心に約300人と、大盛況であった。柏キャンパスの多様性と学融合を実感できる講演会であった。



質疑応答で盛り上がる会場の様子

柏キャンパス・リエゾン室

柏キャンパス一般公開開催

部局

10月29日（金）、30日（土）の両日にわたり柏キャンパス（大学院新領域創成科学研究科、宇宙線研究所、物性研究所、大気海洋研究所、数物連携宇宙研究機構、人工物工学研究センター、空間情報科学研究センター、環境安全研究センター柏支所、柏図書館）及び柏Ⅱキャンパス（生涯スポーツ健康科学研究センター）において一般公開が開催された。

この一般公開は、地域・社会との連携・交流や知的啓発を目指して、柏キャンパスへ移転した当初から実施されてきたもので、地域に根付いた行事になりつつある。今年には柏キャンパスの10周年にあたり、「柏発！科学の最前線―海の下から宇宙の果てまで―」をテーマに、キャンパスとして特別講演会を柏図書館で開催したのを始め、各部局とも、日頃の研究成果の紹介、実験コーナー、入門講座等それぞれ特色ある催しが行われた。

2日目は台風の接近に伴いあいにくの雨となったが、両日とも盛況で、2日間を通して約3500名の来場者が訪れ、地域に開かれたキャンパスの雰囲気が感じられた。



研究成果の紹介を熱心に読む来場者

大学院人文社会系研究科・文学部

外国人留学生見学旅行を実施

部局

11月11日（木）・12日（金）の両日、恒例の外国人留学生見学旅行を実施した。参加者は、留学生42人、引率教職員等9人の合計51人。

8時30分過ぎに、本郷の医学部2号館本館前広場から貸切バスで出発。高速道を利用し、2時間程で群馬県富岡市に到着。日本最初の官営模範器械製糸場で、建物は国史跡の重要文化財であり、現在世界遺産暫定一覧表にも記載の『富岡製糸場』を施設案内の方の説明を受けつつ見学し、次に、同市の『一之宮貫前神社』を参拝。この神社は、1400年の歴史があり、りっぱな社殿は国

の重要文化財に指定されている。

昼食後は、『群馬県立歴史博物館』を見学し、特別に学芸員の先生から、県の歴史や展示物について詳しくご説明をうかがった。初日最後は、『大塚製薬高崎工場』を訪問した。

夕闇迫るなか足早にバスに乗りこみ、宿泊地である水上温泉郷に向け出発した。ホテルに到着後は、各自温泉に浸かり疲れを癒した後、夕食を兼ねた懇親会では、和やかな雰囲気の中、参加者相互の親睦を深め楽しいひと時を過ごした。

2日目は、まず水上近くの『谷川岳』へ向け出発。晩秋の山麓は、紅葉の真っ盛り。ロープウェイ到着駅の天神平では新雪も残っており、留学生は、麓との温度差にとまどいぎみであった。次の見学施設、『たくみの里』（三国街道旧須川宿）には、色々な体験施設があり、そば打ちを体験したグループがあれば、秋の田園風景の散策に勤しんだグループがあったりと、其々が思い思いの体験施設等に足を運んだ。散策途中に訪ねた泰寧寺の山門は、群馬県指定重要文化財で、その荘厳さに往時の宿場の繁栄を想像させられつつ、施設を後にし本学への帰路についていた。

バスは予定時刻より若干遅く19時20分頃本郷構内に到着。こうして今年の見学旅行は、両日とも好天に恵まれた中、日本の歴史と文化、最先端の工場、美しい自然を実感しながら、留学生同士の触れ合いなど、参加者に多くの思い出を残し無事終了した。



群馬県立歴史博物館前での全員集合写真



谷川岳・天神平での集合写真



「手漉き工芸和紙」体験中の留学生



新入生 5名

大学院法学政治学研究科・法学部
10月期新入生歓迎会を開催

11月11日(木)、16時半から屋外で餅つきを行った後、18時から法文1号館1階学生ラウンジにて法学政治学研究科総合法政専攻の10月入学、大学院外国人研究生の新入生歓迎会が開催された。

留学生、客員研究員、日本人学生チューター、教職員等、総勢82名が出席し、熱気あふれるパーティとなった。

餅つきは、留学生も加わって餅をついたり、できた餅を小さく丸めたり、貴重な体験を楽しんでいた。

学生ラウンジでの新入生歓迎会では、山下友信研究科長の挨拶、山口厚副研究科長による乾杯の後、歓談に入った。

宴たけなわになった頃、台湾出身留学生2名による台湾に関するクイズ、次に中国出身留学生7名による民族衣装のファッションショー、最後に韓国出身留学生と研究員の有志7名による合唱が披露された。

終盤に参加者全員で集合写真を撮り、久保文明綜合法政専攻長の挨拶で20時ごろ散会となった。

今回、初めて法文1号館内で留学生と教職員が協力し合ってパーティを企画・運営し、外国の情緒と手作り感あふれる新入生歓迎会となった。



集合写真

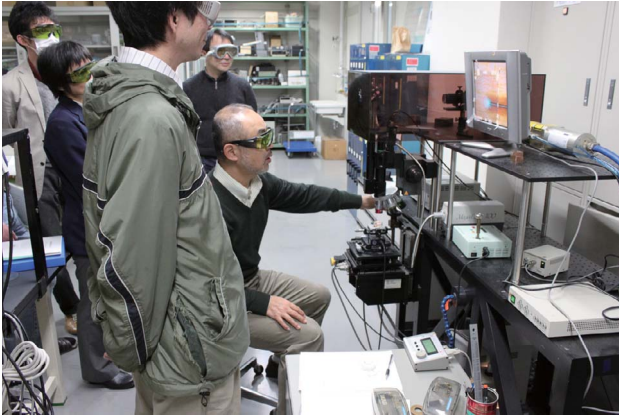


お餅をつく修士1年バヌバンさん

物性研究所
技術職員研修「レーザー技術」開催される

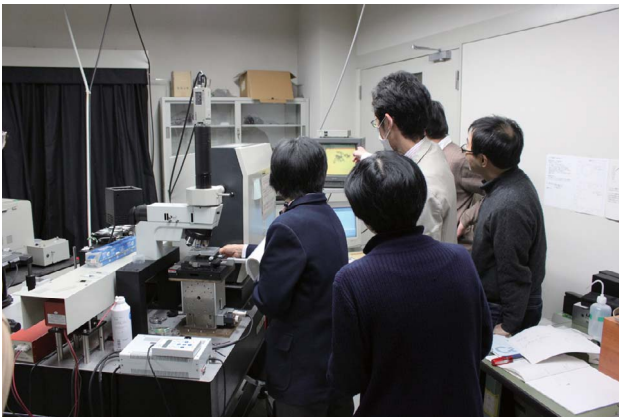
11月25日(木)、26日(金)物性研究所において、平成22年度東京大学技術職員研修「レーザー技術」が開催された。生産技術研究所から1名、環境安全衛生部から1名、物性研究所から2名の計4名が本研修を受講した。一方、物性研の7名の技術職員が講師となり、全ての講義と実習を担当した。

25日(木)の午前は、レーザー使用の安全に関する講義と、レーザーの基礎およびレーザー加工の基礎に関する講義が行われた。午後は実習で使用するレーザー加工機の概要とNC(数値制御)プログラミングに関する講義を行った後、各人に実際にレーザー加工機を使って、課題の形状を切り抜くレーザー切断加工の実習を行った。間違ったプログラムを組んだ結果、“ユニークな形状の作品”が完成したケースもあったが、最終的には全員が意図した加工を行うことが出来た。和気あいあいとした雰囲気の中で、1日目の研修は終了した。



レーザー加工の実習

26日（金）は一転してレーザーの物性研究への応用としてレーザーラマン分光の研修を行った。午前中にラマン分光及びそれと相補的な赤外分光の基礎に関する講義を行い、その後、高分子やグラフェン、カーボンナノチューブ、各種半導体のラマン分光による実験研究例がそれぞれ紹介された。午後には実習として、物性研究所の光学測定室にある顕微ラマン分光装置を用いて、講義で説明された試料のラマン分光測定を行った。また受講者にも、各自が日頃業務に用いている試料を持参してもらい、それぞれラマン分光測定を行った。



レーザーラマン分光の実習

この研修は技術職員が中心となって企画・準備し、また物性研究所の部門をまたいでの協力により開催された。受講者はもとより講師陣も様々な点で良い勉強をさせてもらった。2日間ではあるが、受講者から講義や実習中にも積極的に質問が飛び出し、非常に内容が濃い研修を11人全員が一丸となって楽しく行い、大成功のうちに終了した。

最後に本研修の実施にあたり縁の下の力持ちとして支援して下さった技術部長ならびに物性研事務部総務係の皆様にお礼申し上げます。



受講者（前列）及び講師（後列）の集合写真

環境安全研究センター

市民と共に本郷キャンパス落ち葉の堆肥化を実施中

環境安全研究センターでは、本郷キャンパスの落ち葉の堆肥化に取り組んでおり、昨年11月から12月まで3回にわたって、教職員・学生の有志、市民と共に作業を行った。

本学ではごみを分別して資源とすることによりごみの減量化を目指しているが、落ち葉は資源化に人手がかかるなど難しく、全学的な取り組みが行われていなかった。しかし、2009年10月に文京区リサイクル清掃課と共に、「学校ごみダイエットマニュアル」(<http://www.esc.u-tokyo.ac.jp/> 参照)をまとめたことをきっかけとして、学生、教職員、市民ら有志による落ち葉の堆肥化プロジェクトチーム「東京大学けやきの会」を発足。この会と施設部環境課・保全課環境整備チーム、環境安全研究センターのスタッフの力を合わせることで落ち葉の堆肥化を実現した。

11月10日（水）、12月3日（金）、12月18日（土）の3回の作業日には、親子連れなど地域住民ボランティアも含め延べ150名が参加し、龍岡門横の落ち葉堆肥場で、落ち葉の積み込み、切り返しなどの作業を行い、汗を流した。この3回の作業で、本郷キャンパスで発生する年間60トン以上の落ち葉の1割強にあたる、約8トンの落ち葉を堆肥化し、その分の可燃ごみを削減したことになる。



熱心に説明を聞く参加者

今後も定期的に切り返しなどの作業を行っていき、春には堆肥ができあがる予定だ。できた堆肥は学内での利用に加え、作業参加者に配布するほか、地域に還元し、資源循環型のキャンパスを目指していきたい。

今後の作業予定等はウェブページからご覧ください。
東京大学けやきの会：

<http://www.esc.u-tokyo.ac.jp/etc/keyaki.html>



分担して堆肥箱に落ち葉を積み込む

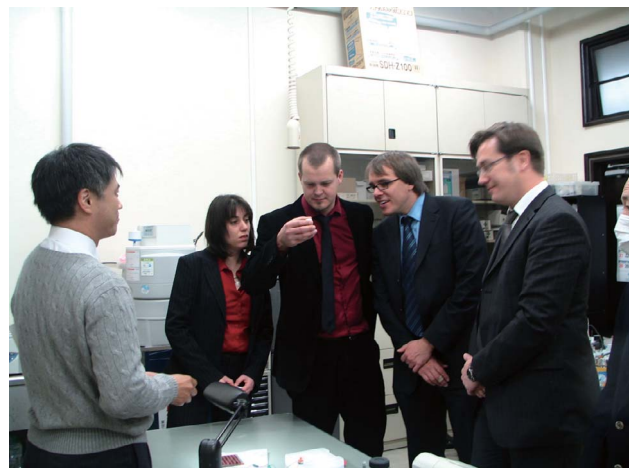


発酵が進んでいるため湯気が上がっている

先端科学技術研究センター
日独若手研究者交流、行われる
部局

外務省の交流事業の一環で来日した、ドイツの若手研究者4名が11月30日（火）に先端研を訪問した。今年「太陽光発電」を専門とする若手研究者だったことから、エネルギー・環境技術国際研究拠点 Solar Quest を有する先端研がその訪問先の一つに選ばれたものである（10日間の滞在中に、資源エネルギー庁、NEDO、産総研、東工大などの機関の他、太陽電池メーカーを数社を訪問とのこと）。

冒頭、中野義昭所長がブリーフィングも兼ねて先端研の概要説明を行った後、瀬川研究室へ移動。久保貴哉特任准教授が色素増感太陽電池に代表される有機系太陽電池などをデモなども交えて説明を行った。同じ太陽電池でも、彼らが専門とする分野とは若干違っているためかえって新鮮だった様で、様々なサンプルをみて「実物はやはり興味深い」と熱心に覗き込んでいた。



久保特任准教授（左）と若手研究者たち

Solar Quest の学内連携先であり、超高効率太陽電池の研究開発の一翼を担う生産技術研究所・藤岡洋研究室の見学後、先端研に戻って、ドイツ側の研究者から研究紹介のプレゼンテーションがあった。Solar Quest に関係する瀬川研、中野研、岡田研、宮野研の若手研究者約10名に加え、久保特任准教授、岡田崇至准教授などと質疑応答も交わされた。

プレゼン終了後は、軽食をつまみながら、日本側研究者が用意したポスターセッションの時間となった。徐々に場がほぐれて最後はさまざまな質問を投げかけてくるドイツの研究者に対して、熱く自身の研究成果を説明する様子も見られた。



ポスターセッションの様子

先端研としては、今後ともこのような実質的な交流を積極的に図っていききたいと考えている。

社会科学研究所

第24回社研シンポジウム「現代日本のガバナンス」を開催

12月1日（水）、弥生講堂・一条ホールにて、社会科学研究所国際シンポジウム「現代日本のガバナンス」が開かれた。今回で24回を数える研究所主催のシンポジウムのテーマとして、現在進行中の全所的プロジェクト「ガバナンスを問い直す」をとりあげ、海外から気鋭の研究者を招いた討論会となった。

「ガバナンス」は、1990年代以降に人口に膾炙するようになった概念の一つである。本シンポジウムでは、国際的な比較の観点から、現代日本の社会が直面するガバナンス問題を明らかにするとともに、この概念をめぐるこれまで社会科学の諸分野において進められてきた議論の相互参照・比較を行い、分析の道具としての応用可能性の検証を試みた。

現代日本の福祉国家改革と食糧政策改革について、アメリカ・シラキュース大学のマルガリータ・エステベス＝アベ教授とイギリス・シェフィールド大学の武田宏子講師が報告したほか、日本企業のコーポレート・ガバナンスについて当研究所の田中亘准教授が外国の事例と比較しつつ論じた。

また、ドイツ・オスナブリュック大学のR・チャータ教授、タイ・タマサート大学のT・カシアン講師、オーストラリア・ニューサウス・ウェルズ大学のC・ピッカー教授がそれぞれ移民統合政策、ガバナンスをめぐる言説の政治、紛争解決を通じたWTOのガバナンスについて興味深い論点を提供した。

「ガバナンス」に関する問題の広がりや、諸分野におけるガバナンス論の多様性を確認するとともに、パネル・ディスカッションでは100名余の参加者を交え、ガバナンス論の可能性についても議論を深めることができた。

シンポジウムの成果は、研究所の英文刊行物として出

版された上で上記プロジェクトに受け継がれる予定である。



シンポジウムの様子

大学院農学生命科学研究科・農学部

動物慰霊祭開催される

12月3日（金）11時から弥生キャンパス内動物慰霊碑前において第92回動物慰霊祭が行われた。祭式は明石博臣教授（前獣医学専攻長）及び佐々木伸雄附属動物医療センター長の慰霊の言葉に始まり、多くの参列者が教育・研究に供され生命科学の発展に大きく寄与した動物の御霊に思いをいたし献花を行った。前日の豪雨により開催が危ぶまれていたが、当日は晴天に恵まれ200名を超える参列者があった。



慰霊の言葉を述べる 佐々木 動物医療センター長



献花の順番を待つ参列者

大学院情報理工学系研究科

創造情報学専攻の田中久美子准教授が著書「記号と再帰」でサントリー学芸賞と大川出版賞を受賞

創造情報学専攻の田中久美子准教授に対し、著書「記号と再帰 -- 記号論の形式・プログラムの必然 --」の成果により、サントリー財団から第32回サントリー学芸賞（思想・歴史部門）、ならびに大川財団から第19回大川出版賞が贈られた。前者の授賞式は12月6日（月）に東京・丸ノ内の東京會館で行われた。

サントリー学芸賞と大川出版賞と、分野が大きく異なる二つの賞を同時に受賞したのは初めてであり、同著は、文系理系の両方の観点から評価されたことになる。

サントリー学芸賞は、広く社会と文化を考える独創的で優れた研究、評論活動を、著作を通じて行った個人に対して贈られるものである。人文系の芥川賞などと呼ばれることもあり、通常は人文科学分野の学際的な著作が対象となる。岩井克人氏の選評によると、「記号的存在としての「人間」が抱える困難を先鋭的に示した書物」として同著の思想的側面が評価されている。情報理工学系研究科で同賞を受賞したのは准教授が初めて。

一方の大川出版賞は、情報・通信分野に関する優れた図書を表彰するもので、情報理工学系研究科も過去に数々の受賞がある。同著が情報理工分野の成果であるプログラミング言語を、記号論という新しい切り口で考え直している点が評価された。

准教授の研究テーマは一貫して自然言語や人間の記号系に内在する数理にあり、基礎から応用までさまざまな取り組みがある。同著は、人文科学の分野でここ百年程思想的に一潮流を形成している記号論を、プログラミング言語に適用することで形式的に整理しなおし、プログラミング言語に内在する人間の記号形態としての必然性を論じるものである。准教授は、本学の情報学環に講師として勤務していた時期からこのテーマに取り組み始め、「機械を制御するための記号に限定される範囲において、その形式性を通して、人間の記号世界の本質の一端を捉え直す試論」（サントリー学芸賞受賞の言葉）として結実した。



サントリー学芸賞授賞式での田中久美子准教授

大学院工学系研究科・工学部

ルース在日アメリカ大使と東大大学院生の交流会を開催

東京大学グローバルCOEプログラム「学融合に基づく医療システムイノベーション（CMSI）」は、12月8日（水）、ルース在日アメリカ大使を招き、主に医学系、工学系、薬学系研究科から選抜された東京大学大学院生45名を集めた交流会を医学部中央図書館で開催した。

この交流会は、リラックスした雰囲気の中で大学院生と自由に話し合いたいというルース大使の希望で、昼食のサンドイッチを食べながら行われた。会場は学生たちの熱気に包まれ、ルース大使は、息つく暇もなく、時にはジョークも交え次々と学生たちの質問に答えた。

学生からは、日本とアメリカの教育システムの違い、起業、留学、リーダーシップ、政治経済に至るまで、絶え間なく質問の手が上がり、予定されていた1時間30分はあっという間に過ぎた。

交流会の終わりにルース大使は学生一人一人と握手をし、これからもなんでも前向きに吸収し、学んでいくよう笑顔で励ました。

ルース大使が去った後も、学生たちは興奮冷めやらず会場に残り、今回の交流会のモデレーターである木村廣道薬学系研究科教授、CMSIリーダーの片岡一則教授らと意見交換をした。



参加者全員と記念撮影



学生からの質問に答えるルース大使



交流会を終えて学生と握手をかわすルース大使

生物生産工学研究センター

シンポジウム「微生物代謝研究におけるケミカルバイオロジーの最前線」開催される

12月8日(水) 弥生講堂において生物生産工学研究センターシンポジウムが開催された。本センターは、微生物、植物の有用機能を解析・増強するバイオテクノロジー研究を強力に推進し、その成果を環境修復、不良環境地域での作物生産、省エネルギー・環境低負荷型食糧生産に関連する技術開発に応用することを目的としていることから、今年のテーマは「微生物代謝研究におけるケミカルバイオロジーの最前線」に設定した。

微生物によって工業生産されているアミノ酸などの一次代謝産物や、抗菌、抗ガン活性を示す微生物の二次代謝産物の生合成機構、さらには、その作用メカニズムに至るまでの研究が以下の8名の演者によって紹介された。本センターの西山真教授は、我が国の発酵工業で重要なアミノ酸の新しい生合成メカニズムの普遍性について構造生物学の側面から紹介し、福井県立大学の濱野吉十講師は、抗菌ペプチドとして工業利用されているポリリジンの生合成メカニズムの解明について発表した。富山県立大学の尾仲宏康准教授は、放線菌の生産するビスインドール抗生物質の多様な生合成経路について、山形大学の豊増知伸准教授は、糸状菌の高機能キメラ型ジテルペン合成酵素による抗ガン物質の生合成機構について

発表を行った。北海道大学の及川英秋教授は、微生物酵素を利用したペプチド系抗腫瘍物質の酵素合成法について化学者の視点で紹介した。本センターの葛山智久准教授は、これまで解明してきたテルペノイドの生合成機構を概説するとともに、複雑な反応を触媒するジテルペン環化酵素の構造基盤について発表した。最後のセッションでは、理化学研究所の長田裕之主任研究員が、理研におけるケミカルバイオロジー研究基盤施設での研究の取り組みと糸状菌の生産するフミトレモルジンの生合成研究を紹介した後、「化合物アレイ」を用いた創薬スクリーニングについて発表した。最後に、エーザイ株式会社の小竹良彦研究員は、放線菌から単離されたプラジエノライドを抗ガン剤のリード化合物とした創薬研究を紹介した。

いずれの発表も、微生物代謝研究におけるケミカルバイオロジーの最前線にふさわしい発表内容であった。160人の参加者を迎え、盛会のうちに終了した。



シンポジウムの様子

社会科学研究所

ソウル大学日本研究所職員来所

12月13日(月)にソウル大学日本研究所行政室長、鄭璉祐(チョン・ヨヌ)氏が社会科学研究所事務室に来所された。

同研究所は、国際研究所日本研究センターを発展的に改組して、2004年に設立された新しい研究機関で、2008年、韓国人文学(HK)海外地域研究分野研究所に選定され、「現代日本生活世界研究の世界的研究拠点の構築」を目指しており、我が国の大学・研究機関とも精力的に協力関係を構築しつつある。社会科学研究所とは、2008年度から共同シンポジウムを開催するなどの学術交流を重ねている。

ソウル大学においても、法人化法案が通過し、いよいよ法人化への移行作業を開始するとのことである。今回の訪問では、法人化に伴う、事務職員の意識変化や教育・研究支援の質の向上などについて、各事務担当者と意見交換を行った。



チョン・ヨヌ氏（中央）と社研事務部職員

物性研究所

事務局 事務職員向け「物性研見学ツアー」開催!

12月13日（月）、事務職員や研究室秘書など、日頃研究・教育の支援業務に携わる職員を対象に、物性研の研究活動を広く知っていただくための見学ツアーが開催された。物性研の他5つの部局から約40名が参加した。

見学に先立ち、家泰弘物性研究所長から、物性研の研究内容である“物性科学”について、及び物性研の沿革について約1時間説明があった。元素、半導体、磁性体など物性科学の基礎から、例えば磁気ハードディスク、発光ダイオードといった物性科学の様々な成果に至るまでわかりやすくご説明いただき、参加者は熱心に耳を傾けていた。終了後、所内にある4か所の実験施設を見学した。



家所長によるレクチャー

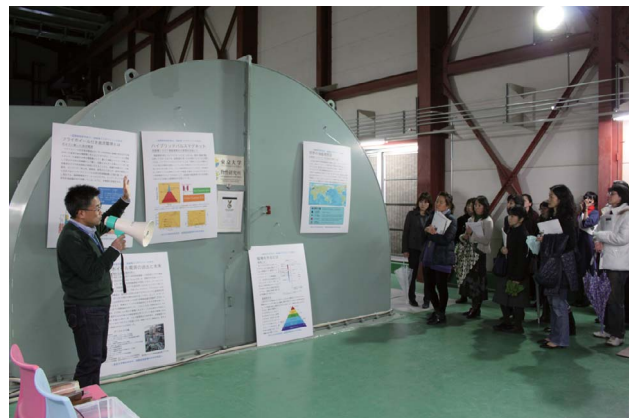
はじめにスーパーコンピュータ室を見学した。全国共同利用に供される2つのスパコンが整然と並び、約4,000ものCPUが一般家庭約2,000軒相当の電力で、冷却のため大きな音を轟かせて稼働している光景は圧巻だった。



スーパーコンピュータ室

続いて、機械工作室とガラス工作室を見学した。ここでは研究者が実験で用いる器具などを熟練の専任職員が製作しており、数十種類の加工用機械があった。なお今年度の「業務改善理事賞」を受賞した「自動貸出装置」(物性研図書室)はここで製作された。また、ガラス工作室ではバーナーを使ったガラス加工を実演していただき、参加者からは歓声があがった。

次に、国際超強磁場科学研究施設実験棟にあるコンデンサ電源とフライホイール付き直流発電機を見学した。これらは世界最高レベルの強い磁場を発生するために必要な発電機であるが、特に直流発電機は世界最大規模としてギネスに認定されている。



フライホイール付き直流発電機

最後に、先端分光実験棟にある大規模な恒温クリーンルームを見学した。強力なレーザーを用いて物性研究を行う世界で唯一の実験施設で、例えば1フェムト秒(10^{-15} 秒)の間に、1テラワット(10^{12} ワット)の出力を持つレーザー光を発生させることができる、とのことだ。これは、瞬間的ではあるが日本の総発電量に匹敵するという。

事務職員が、より良い研究・教育活動支援を行うには、研究内容やその現場を知ることとはとても重要だとあらためて感じた。

最後に家所長をはじめご協力をいただいた皆様にお礼申し上げます。

医科学研究所

附属病院でクリスマス・コンサート開かれる

12月14日（火）16時10分から、医科研附属病院において恒例のクリスマス・コンサートが開催された。今年は、東大白金キャンパスの隣にある聖心女子学院中等部・高等部の生徒さん49人がボランティアで来てくださり、楽しい催し物をご披露くださった。

サンタの衣装に扮した今井浩三病院長の挨拶のあと、まず「アベマリア」の合唱で始まり、ダンス部によるポップミュージックに合わせた元気なダンス、手話サークルによる手話を交えて「Tomorrow」の合唱と続いた。そしてオーケストラ部によるクリスマスソングのメドレーが演奏され、会場は和やかな雰囲気にも包まれた。後半は赤いサンタの衣装に身を包んだ生徒たちが可愛らしいダンスとクリスマスにちなんだ「O Holy Night」の合唱をご披露くださり、最後に会場の参加者も一緒に「もろびとこぞりて」と「きよしこの夜」を合唱して、コンサートは終了となった。期末試験の合間をぬって練習を重ねた中等部、高等部の皆さんによる、患者さんに安らぎと元気をプレゼントしようという温かい気持ちのあふれる催し物であった。

コンサートの後に聖心女子学院の校長先生と本企画の合唱・手話指導を担当された先生方の紹介がなされた。最後にサンタ姿の尾上裕子看護部長から、出演された生徒さんやご協力くださった先生方への御礼の言葉があり、1時間弱にわたるこの会を締めくくった。退場される聖心女子学院の皆さんへ感謝の拍手がなり響いた。



聖心女子学院中等部・高等部オーケストラ部によるクリスマスソングの演奏



参加者も一緒に「きよしこの夜」を合唱

大学院工学系研究科・工学部

埼玉県教育局 SPP（サイエンス・パートナーシップ・プログラム）開催される

JST（科学技術振興機構）が主催するSPP（サイエンス・パートナーシップ・プログラム）の採択を受けた埼玉県教育局の依頼により、12月15日（水）に、工学系研究科附属工学教育推進機構（CIEE）と大学発教育支援コンソーシアム推進機構（COREF）が連携して本プログラムを実施した。本プログラムは、高校生に工学と社会とのつながりを理解させ、工学に対する生徒の興味・関心を高め、探究心を育成することを目的としたものである。

今回は、SPPの趣旨を考慮し、本学で先進的な研究に取り組んでいる研究室を生徒に訪問してもらうこととし、予め8つの研究室に対して本プログラムへの協力を打診し、快諾を得た。結果として、フライトシミュレータ、ロボット、サイバービヘイビア、フォーミュラカー、スターリングエンジン、医療用ロボット、医用マイクロマシン、ネット家電といった、8つのテーマが研究室訪問のメニューとして準備された。

当日実施されたプログラムには、浦和高校、越ヶ谷高校、越谷北高校、大宮光陵高校、吉川高校、秩父高校、春日部女子高校、富士見高校、戸田翔陽高校の9校から総勢148名の生徒が参加し、集合場所となった11号館1階の講堂には熱気がみなぎった。午前、鈴木真二機構長より本学の概要と研究室についての説明が開始されると、生徒は一様に引き締まった表情となったが、説明が進むにつれ笑顔も見られ、徐々にリラックスした表情となった。

昼食をはさみ、午後からは、20名前後の8チームに分かれて各々事前に希望していた2つの研究室を、それぞれ50分ずつ訪問した。生徒は、最初は遠慮がちに研究室に足を踏み入れたものの、研究室の院生の説明に興味をひかれたのか、やがて感嘆の声をあげるようになり、訪問の時間が近づく頃には矢継ぎ早に質問を飛ばすようになっていた。1回目の訪問と2回目の訪問のインターバルでは、それぞれが訪問した研究室について興奮した面持ちで他の生徒に話をしている様子も見られた。また、引率のために来訪された教員からも研究室訪問は非常に教育的価値が高いものであったとの感想が聞かれた。

研究室訪問が終了した後、11号館の講堂に再度集合して、質疑応答の時間が設けられた。質問と感想が入り交じる、笑顔の絶えない時間となった。最後に鈴木機構長の閉会の辞で会は締めくくられた。



参加した高校生 148 名



研究室を訪問する生徒達

史料編纂所

部局

公開研究会「江川文庫古写真コレクション調査報告」を開催

史料編纂所附属画像史料解析センターでは、12月17日（金）17時より、史料編纂所大会議室（福武ホール地下1階）にて標記の研究会を開催した。

静岡県伊豆の国市にある江川文庫には、江戸幕府の伊豆菰山代官江川太郎左衛門家の史料数万点が所蔵されており、江川文庫調査団（団長：宮地正人本学名誉教授）によって、文化財指定を視野に入れた総合的な調査が進められている。画像史料解析センターの古写真研究プロジェクトでは、2006年から足掛け5年にわたり、江川文庫調査団と連携し、さらに近年は日本大学芸術学部写真学科研究室（高橋則英教授）の協力を得て、同文庫所蔵古写真コレクションの調査・研究を行なっており、今回の研究会はその成果を発表するものである。

当日は、はじめにプロジェクト代表の保谷徹教授から調査経過の説明がなされたのち、日本大学大学院の中島実英・竹内涼子氏による「江川文庫古写真調査からのケーススタディー」と、史料編纂所史料保存技術室写真担当の谷昭佳氏による「幕末・明治初期の写真史における江川文庫古写真コレクションの位置—ジョン万次郎の

写真活動を中心にして—」の2報告があり、参加人数は約50名であった。

中島・竹内報告では、江川文庫所蔵古写真調査の経験から、所蔵先に出張して古写真を調査する際の方法・手順について説明と若干の提言がなされた。当初は手探り状態で開始された歴史学と写真学との共同調査であったが、今回報告された書誌データの作成や写真画像の複写撮影などの方法は、今後の古写真調査のモデルケースになるものと期待される。

谷報告では、NHKニュースでも報道されたジョン万次郎撮影のアンプロタイプ写真など、これまで知られてこなかった古写真コレクション総計1678点の調査・研究の概要が主要な写真画像とともに紹介された。報告中、写真の画像のみを史料として被写体や撮影者の人物比定を行なうだけでなく、モノとしての写真から多様な情報を引き出すような古写真研究の方法論の重要性がとくに強調された。

今後も画像史料解析センターの古写真研究プロジェクトでは、今回の研究会で報告された諸成果をふまえ、さらなるデータの収集・蓄積とともに、写真の特性を理解したうえでこれを史料化する写真史料論の構築を目指し活動していく予定である。



研究会の様子

先端科学技術研究センター

部局

ひらめき☆ときめきサイエンス
「ロボットで探る昆虫の感覚と脳の行動の不思議」開催

12月18日（土）、2010年度日本学術振興会委託事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」が神崎研究室主催で実施された（後援：東京都目黒区教育委員会、日本比較生理生化学会、東京大学先端科学技術研究センター）。三年連続で行われており、毎回、募集定員を大幅に上回る人気プログラムである。本年も、全国から40名が選ばれた（中学生：20名、高校生：18名／男子：25名、女子：13名／当日欠席2名）。昨年からは手話通訳もつけており、今年は聴覚障害を持つ生徒が7名参加した。

本プログラムはサポート体制も非常にしっかりしており、38名の参加者に対してスタッフは実に22名。うち、

5名は筑波大学附属聴覚特別支援学校等の手話サポート、さらに6名は現役高校教員（遠くは静岡から）という万全の布陣だ。これら教員は神崎研が独自に進めている教育プロジェクトで講習を受けられた先生方である。その背景には2011年度から開始される新教育課程の「生物」で感覚・脳・行動で実習を踏まえた指導をすることが求められていること、実習対象が神崎研が主に扱っている「カイコガ」であること、に起因している。スタッフはもちろん全員が手弁当。その努力の甲斐もあり、昨年は日本学術振興会の「よく工夫されたプログラム」に選ばれている。

午前10時の神崎亮平教授のあいさつと共に長い一日が始まった。「昆虫の感覚と脳と行動の不思議」と題された講義の後、実習・実験の連続だ。「カイコガのオスがメスを探すしくみ」や「昆虫の脳と神経のしくみ」などのプログラムが班単位で進められた。昼食は全員でお弁当を食べながら神崎研メンバーらによるマジックショー。といっても単なるアトラクションではなく、講義や実習で学んだ「ヒトの見え方とムシの見え方」を体感できるような趣向をこらした内容だ。それまでの緊張感を解くブレイクタイムの後、4つの実習が続き、いよいよ神崎研究室の見学が行われた。ほぼ初めての東京大学、初めての研究室という最先端研究の現場は非常に新鮮でかつ刺激的に映ったのではないだろうか。



実習は班ごとで



手話通訳でサポート

17時前の終盤に差し掛かった頃、神崎教授がこのような実習で必ず行う「儀式」がある。「全員起立!」「(犠牲になったムシさんに) ありがとう」と感謝の気持ちを述べる。真理を追求するために、私たちは時として何かを犠牲にしなければいけないことがある。その際、謙虚な気持ちを忘れないこと、そんな研究者としての心構えを伝えることも、このようなプログラムではとても大切なことであると考えている。そして最後に、「昆虫ロボット博士号」と書かれた「未来博士号」が神崎教授の手から一人ひとりに渡された。「とてもわかりやすい説明で楽しかった」「小さな昆虫の脳が好きになった」などの感想に、「疲れたよ」と言いつつも笑顔の神崎教授。これから10年後、20年後に「未来」がとれた「博士号」の誕生を心から期待したい。



全員集合（前列右から2人目が神崎教授）

大学院工学系研究科・工学部

量子科学研究中心・レーザーアライアンス 合同シンポジウム / 第9回 先端量子科学アライアンスセミナーが開催される

12月22日（水）に工学部11号館講堂にて、本学大学院工学系研究科附属量子科学研究中心（PSC）および総合研究機構レーザーアライアンスによる合同シンポジウム、そして量子科学研究中心が進めている文部科学省「最先端の光の創成を目指したネットワーク研究拠点プログラム（光拠点プログラム）」による事業「量子科学アライアンス（APSA）」の主催によるセミナーが開催され、学内外および企業より約70名の参加があった。

今回のシンポジウム・セミナーの主題は「テラヘルツ電磁波」であり、光と電波の中間波長の電磁波として近年、急速に発展している研究分野である。

五神真 教授（PSC センター長）の開式の辞、北森武彦 教授（工学系研究科長）の挨拶に引き続き、前半はAPSA セミナーとして島野亮 准教授（理学系研究科 物理学専攻）により、テラヘルツ電磁波に関する発生・検出および実験の現状について学生向けのレビューを含めた講演が行われた。後半のシンポジウムでは、貴田徳

明 准教授（新領域創成科学研究科 物質系専攻）による電気磁気効果を示す物質研究への応用、小田直樹氏（NEC 誘導光電事業部）によるテラヘルツカメラの開発、福永香氏（独立行政法人情報通信研究機構 電磁波計測研究センター）によるテラヘルツ電磁波計測の文化財修復への応用に関する招待講演が行われ、活発な討論が行われた。



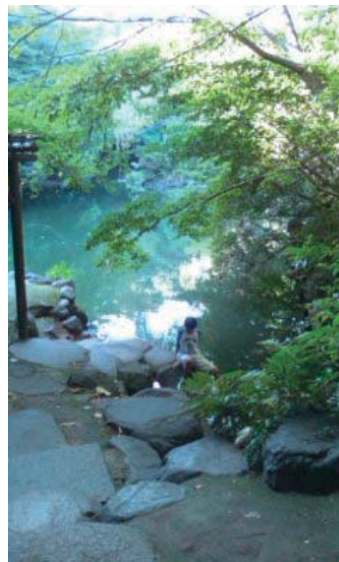
シンポジウムにて挨拶される北森工学系研究科長



講演者 4 名：(左上) 島野准教授 (右上) 貴田准教授
(左下) 小田氏 (右下) 福永氏

読者投稿写真

朝

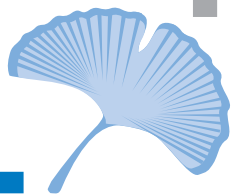


夏の思い出

樹と光の
対話



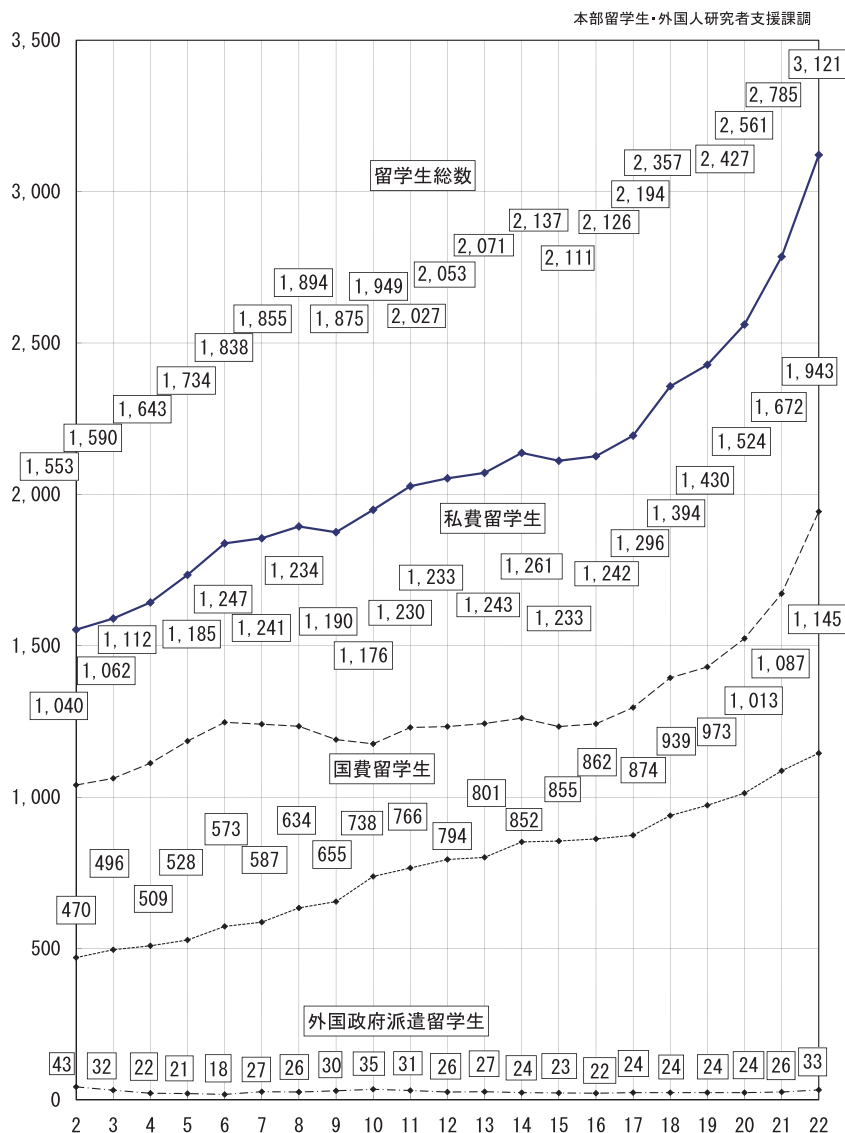
(撮影：大学院情報学環・学際
情報学府 佐藤志乃さん)



平成 22 年度外国人学生数－国費外国人留学生数 1,145 人、私費外国人留学生数 1,943 人、外国政府派遣留学生数 33 人、その他の外国人学生（在日外国人学生）数 283 人－

本学では、毎年 5 月と 11 月の年 2 回、同月 1 日現在の外国人学生数を調査している。これをもとに各年度 11 月 1 日現在の外国人留学生数の推移を示した。また、本年 11 月 1 日現在の外国人学生数は次頁以降のとおりである。

東京大学外国人留学生受入数の推移
(各年度 1 月 1 日現在)



全学生数に対する外国人留学生数の比率

事 項	A 全学生数 (人)	B 日本人学生数 (人)	C 外国人留学生 (人)	C/A 比 率	平成 21 年度 比 率
学部レベル	14,233	13,763	299	2.10%	2.01%
大学院レベル	14,657	11,706	2,822	19.25%	17.19%
計	28,890	25,469	3,121	10.80%	9.72%

※全学生数欄には「その他の外国人学生」(在日外国人学生)を含む。
 ※学部レベル学生数(全学生数及び外国人留学生数)には、学部特別聴講学生 30 名を含む。
 ※大学院レベル学生数(全学生数及び外国人留学生数)には、大学院特別聴講学生 20 名を含む。
 ※研究所に所属する外国人研究生 11 名は、大学院レベル学生数(全学生数)に含む。そのうち 10 名は、外国人留学生数にも含む。
 ※比率欄の数は四捨五入。

平成 22 年度外国人学生数

平成 22 年 11 月 01 日現在

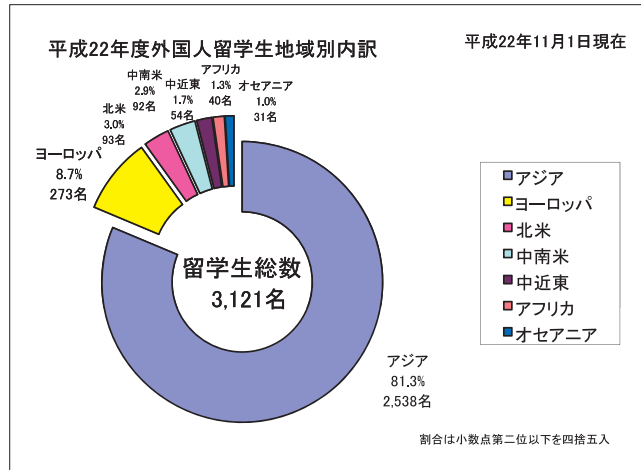
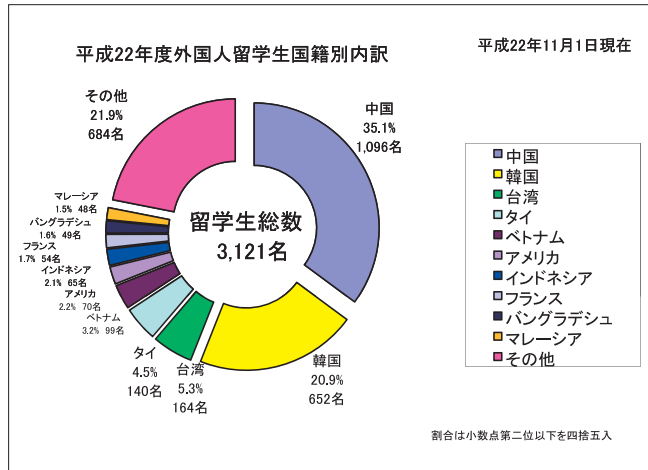
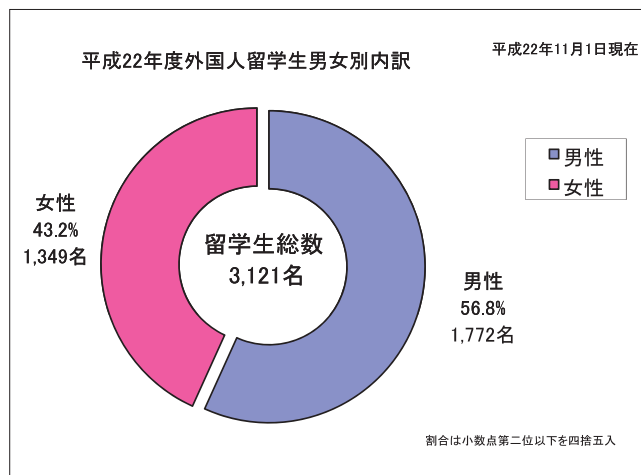
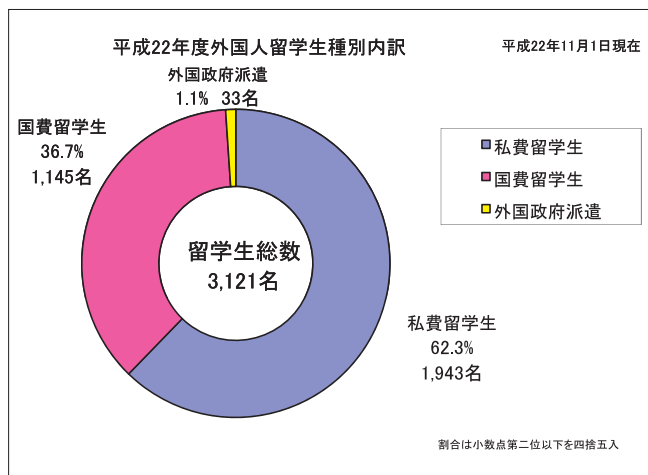
区 分	学部				大学院								研究所等		合 計			
	学生		研究生等		修士課程		専門職 学位課程		博士課程		外国人 研究生等		大学院 研究生				研究生	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
国費 (a)	78	39	0	0	174	122	3	4	330	204	109	82	0	0	0	0	694	451
	117		0		296		7		534		191		0		0		1145	
外国政府派遣 タイ	3	4	0	0	2	1	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	9	6
	7		0		3		0		5		0		0		0		15	
外国政府派遣 マレーシア	1	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	4	0
	1		0		1		0		2		0		0		0		4	
外国政府派遣 シンガポール	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1
	4		0		0		0		0		0		0		0		4	
外国政府派遣 韓国	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0
	9		0		0		0		0		0		0		0		9	
外国政府派遣 アラブ首長国連邦	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	1		0		0		0		0		0		0		0		1	
計 (b)	17	5	0	0	3	1	0	0	6	1	0	0	0	0	0	0	26	7
	22		0		4		0		7		0		0		0		33	
私費 (c)	37	36	30	21	302	242	11	18	434	341	170	188	12	7	4	4	1000	857
	73		51		544		29		775		358		19		8		1857	
小計 (d)(a)+(b)+(c) (在留資格「留学」の者)	132	80	30	21	479	365	14	22	770	546	279	270	12	7	4	4	1720	1315
	212		51		844		36		1316		549		19		8		3035	
私費 (e) (在留資格「留学」以外の者)	23	12	1	0	5	4	0	0	14	8	7	10	0	0	2	0	52	34
	35		1		9		0		22		17		0		2		86	
外国人留学生合計 (f) ((d)+(e))	155	92	31	21	484	369	14	22	784	554	286	280	12	7	6	4	1772	1349
	247		52		853		36		1338		566		19		10		3121	
永住者等 (g)	110	26	0	0	50	21	4	2	35	28	5	0	0	1	0	1	204	79
	136		0		71		6		63		5		1		1		283	
外国人学生 総計 (f+g)	265	118	31	21	534	390	18	24	819	582	291	280	12	8	6	5	1976	1428
	383		52		924		42		1401		571		20		11		3404	

学部・研究科等別外国人留学生数

平成 22 年 11 月 01 日現在

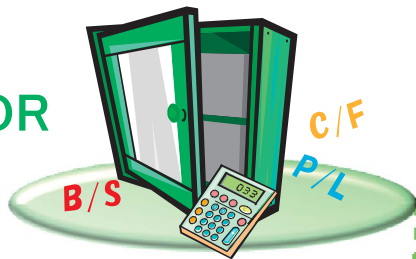
区 分	学部				大学院								研究所等		小 計		合 計	
	学生		研究生等		修士課程		専門職 学位課程		博士課程		外国人 研究生等		大学院 研究生					
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費
学部																		
教養学部 (前期課程)	50	64															50	64
法学部	7	6															7	6
医学部		1		1														2
工学部	33	26		18													33	44
文学部	6	3		2													6	5
理学部	5	3															5	3
農学部	1	5		3													1	8
経済学部	4	15															4	15
教養学部	6	1		28													6	29
教育学部	1	2															1	2
薬学部	4	4															4	4
小 計	117	130		52													117	182
大学院																		
人文社会系研究科					14	25			19	45	20	47		3			53	120
教育学研究科					2	12			3	30	3	14		1			8	57
法学政治学研究科					2	23	1	5	6	29	8	13					17	70
経済学研究科					11	20			2	6	3	6					16	32
総合文化研究科					21	47			42	89	26	44		5			89	185
理学系研究科					9	12			21	15	7	9		1			37	37
工学系研究科					128	208			222	276	51	102		4			401	590
農学生命科学研究科					16	43			79	86	15	44		4			110	177
医学系研究科					6	26		3	26	75	11	11					43	115
薬学系研究科					1	3			9	8	1	12					11	23
数理学研究科					5	4			7	2	1	2					13	8
新領域創成科学研究科					38	61			32	72	8	15					78	148
情報理工学系研究科					29	44			47	44	22	17					98	105
学際情報学府					14	29			19	27	15	35		1			48	92
公共政策学教育部							6	21				4					6	25
小 計					296	557	7	29	534	804	191	375		19			1028	1784
研究所等																		
医科学研究所																2		2
地震研究所																1		1
生産技術研究所																6		6
先端科学技術研究センター																1		1
小 計																10		10
合 計	117	130		52	296	557	7	29	534	804	191	375		19	10	1145	1976	

区 分	国費						私費						合 計						総計		
	学部		大学院等				学部		大学院等				学部		大学院等						
	学部	研究生等	修士課程	専門職学位課程	博士課程	研究生等	小計	学部	研究生等	修士課程	専門職学位課程	博士課程	研究生等	小計	学部	研究生等	修士課程	専門職学位課程		博士課程	研究生等
ヨーロッパ																					
アイスランド																					
フィンランド	1																				
スウェーデン	2																				
ノルウェー																					
デンマーク																					
アイルランド																					
イギリス																					
ベルギー																					
オランダ																					
ドイツ																					
フランス																					
スペイン																					
ポルトガル																					
イタリア																					
ギリシャ																					
オーストリア																					
スイス																					
ポーランド																					
チェコ																					
ハンガリー																					
ルーマニア																					
ブルガリア																					
ロシア																					
ラトビア																					
スロバキア																					
ウクライナ																					
ウズベキスタン																					
ベラルーシ																					
クロアチア																					
スロベニア																					
マケドニア																					
セルビア																					
キルギス																					
グルジア																					
アルメニア																					
モルドバ																					
コソボ																					
小 計	10		36		44	45	135	15	7	1	47	68	138	10	15	43	1	91	113	273	
合 計	117		296	7	534	191	1145	130	52	557	29	804	404	1976	247	52	853	36	1338	595	3121



決算のDOOR

～数字が語る
東京大学



第4回 年々歳々数相似たり？

まずは、なぞなぞから。
安いものでは1品100円からあり、購入した時は費用に認識されるけれど、年度末に財産に変わるものって、なーに？
ヒントー 倉庫にあります。

正解は棚卸資産。一般には企業が販売目的で所有する商品のことで、在庫とも呼ばれています。

東京大学では、コミュニケーションセンターのグッズや附属病院の医薬品、給食の材料などが該当します。購入時は「消耗品費」「内服薬費」などの費用勘定に計上し、年度末の数量確認時(棚卸し)に未使用在庫を「商品」「医薬品」といった財産に振替えます。特に医薬品と医療材料はそのうちほとんどを占め、金額にして約10億円。うち9割が医学部附属病院、1割が医学部附属病院です。



医学部附属病院では2300品目の薬品が常備され、毎日使用されています

ところで、この10億円、「建物」「機械装置」といった通常の財産が金額、件数とも年々増えていくのに対し、ほぼ毎年増減なし。これは医薬品や医療材料が常に一定数保つことが求められる財産であることを意味しています。

現在、医学部附属病院での医薬品の納品額は1日平均3千万から4千万円。毎日の診療以外にも災害時に備え、常に1週間分くらいの在庫を保つため必要な金額です。しかし、薬は使用期限のあるナマモノ。買すぎは廃棄につながります。一方で、高度先進医療を行う東大病院は高額な医薬品も常備し、毎年新薬が出る抗がん剤などにも対応しなければなりません。ここは、日々の診療に影響が出ないぎりぎりまで在庫数と採用品目数を見直し、廃棄率抑制のため使用量のチェックを欠かさない薬剤師さんを始めとする病院スタッフの腕の見せ所です。

また同じく注射器やカテーテルなどの医療材料も計画的な購入、管理を目的とした院内物流システム (SPDシステム) を取り入れ効率化が図られています。これは不良在庫を防ぐだけでなく、緊急事態に365日24時間対応できるような院内の各部署に常に一定数の医療材料や医薬品が配置される仕組みになっています。



SPD倉庫内の消耗品は、まさに「ゆりかごから墓場まで」分娩セット(左)と死後処置セット

なるほど、棚卸資産10億円には患者さんの命と病院財政を支える病院スタッフの弛まぬ努力、そして現場の医師、看護師のみなさんの協力が隠されているのですね。(青)

このコラムへのご意見、ご質問をどしどしお寄せ下さい。お待ちしております！

本部財務部決算課
E-mail: kessan-g@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

★ASIAN DIVERSITY★

No. 4

コーヒー豆の不平等 ーベトナムコーヒーの美味しい飲み方ー

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET)では東洋文化研究所と共催で、毎週木曜日にセミナーを開催しております。今回は池本幸生氏(東洋文化研究所、教授)による、「コーヒー豆の不平等ーベトナム・コーヒーの美味しい飲み方ー」(第4回東文研・ASNET共催セミナー、2010年6月10日開催)をご紹介します。

朝、ベッドから出るのが辛い季節になりましたが、温かくて芳しいコーヒーを頂くと「今日も頑張るぞ!」という気持ちになりますね。私もコーヒーが好きで、コーヒー豆を買いに行きますが、大抵、南米産のものを購入します。皆様はベトナムが世界第2位のコーヒー輸出国であることをご存知でしょうか？

コーヒー豆の品種として主なものは、アラビカ種とロブスタ種です。アラビカは酸味と香りが特徴であり、世界のコーヒー生産量の約3分の2を占めます。他方、ロブスタは苦味とコクを特徴とし、缶コーヒーなど加工用に用いられています。そのため産地が表示されることもなく、「ロブスタの生産国」としてのベトナムはそれほど知られていないのです。

ロブスタを加工せずに、ブラックで頂くこともできます。植民地時代のフランス人達はベトナム産の高品質ロブスタを愉しみ、その飲み方は今でもベトナムに残っています。しかしベトナムで飲まれるコーヒーは、大抵、焙煎時にバターや砂糖を混ぜたり、コンデンスミルクを入れて飲むそうです。コンデンスミルクをたっぷり入れるとホットチョコレートのような味がします。

ここに先進国と生産国との間の、経済力の差による不平等が見えてくるのだそうです。国際社会の求めに応じて「質より量」を重視し、高品質のものを先進国に輸出した後に残った低品質のコーヒーを精一杯おいしく飲むとする工夫が、ベトナムコーヒーの飲み方には反映されているからです。明日の朝、コーヒーを飲まれる際には是非、コーヒー豆の生産国にも思いを馳せてみて下さい。

セミナーの詳細は下記のURLをご参照下さい。
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/6906>
ASNETホームページ
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>



日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET) 安田佳代

★ASIAN DIVERSITY★

★ASIAN DIVERSITY★

★ASIAN DIVERSITY★

※ この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況などと共にご紹介していきます。

政策提言フィードバック

アジアの新たな安全保障協力を

東アジア国際関係が急速に流動化しています。かつて地域安全保障を制度化する第一歩として期待を集めた六カ国協議は停滞を続け、北朝鮮の核保有が既成事実になろうとしています。中国についても、かつては西側諸国との通商が拡大すれば政治的にも協調重視に傾くだろうと期待されましたが、逆に相互依存関係を政治・軍事の手段として利用する方向が強まっています。

こうした情勢を見据え、政策ビジョン研究センター安全保障研究ユニットでは、マッカーサー財団の後援を得てカリフォルニア大学、延世大学との共同研究、「アジア安全保障イニシアチブ」を過去 2 年にわたって進めてまいりました。今回は日本国際問題



講演する藤原帰一教授。
(安全保障研究ユニット責任者)

研究所との共催によって、その研究成果を踏まえた政策提言を政策実務家の皆様に報告し、ディスカッションするための会合を開催しました。

東京開催の本会合は、中国 (11/15 開催)、韓国 (11/17 開催) に次ぎ、第 3 回のセッションに当たります。

政策提言のフィードバックを目指した本会

合は大学にとって実験的な試みであり、安全保障の多角的枠組み構築が出遅れているアジアにおいて、有意義な取り組みといえます。

はじめにカリフォ

ルニア大学の T.J. ペンペル教授、延世大学の韓碩熙 (ハン・スッキ) 教授、および本学の藤原帰一教授より、報告がありました。

フロアからは、北朝鮮問題を始めとする北東アジアの安全保障における緊張への対処に関しては、主要なプレーヤーは新興大国である中国になったとする意見が相次ぎました。日米韓や日米中、日中韓など多様な 3 カ国関係の可能性を見据えつつ、中国を多国間枠組みの中でどう位置づけるかについて、活発な討議がありました。

こうした討議を通じ、経済と安全保障が繋がるための条件を整えることが必要であること、成熟した国民世論の醸成が重要であること、日米や日米韓での関係強化を目指すと共に、中国の多国間の協力へのコミットを促し、サミットを定期的に開催すべきだとする結論が共有されました。

また、安全保障分野での協力を深めること抜きに経済関係を政治化すれば、国家が潜在的な敵や挑戦者に対して経済的なレバレッジを用いる危険があることが確認されました。その上で、経済関係と安全保障に



会合に参加した政治家・官僚等、政策実務家から多くの質問が出され、活発な議論が展開された。

はポジティブな関係もあり、中国が市場を開くほど海外との協力で政策調整をせざるを得ない状況に置かれることに着目し、今後中国は海外の協力を必要とする立場に置かれるとの予測も述べられました。

今回報告した政策提言は当センター HP で公開しています。本プロジェクトでは今後研究成果の出版に向け、準備をしています。

アジア安全保障イニシアチブ・懇談会

Toward New Security Management and Cooperation in Northeast Asia

- 日時：11月18日(木)、19日(金)
- 場所：ザ・キャピトルホテル東急
- 共催：東京大学政策ビジョン研究センター
日本国際問題研究所

主な論点

- ① アジアにおける安全保障協力の現状
- ② 北東アジアの安全保障
 - 北朝鮮問題、鍵となる中国、米国の役割
 - 米国のプレゼンス、経済的相互依存と民主化
 - 中国への対応、日米韓協力
- ③ 北東アジアの緊張緩和
 - 軍備モラトリアム、軍事協力、経済的相互依存の効果
 - 軍備管理の可能性、日韓関係の深化、経済的相互依存

中小企業の出会で新しい産業を

企業間つながり検索システム 試験公開

今日本に求められているのは、新産業分野をスピーディに開拓することです。そのためには、様々な分野の能力の高い企業群の中から、適切な企業群を集め、新たな機能分担を設計する必要があります。個々の企業にとっても新産業形成を目指した新たな機能分担の輪に加わり、異業種との適切な提携関係を見いだせるかどうかは、企業の成長の可能性や経営の安定性を大きく左右するといえます。

当センターの坂田一郎教授と工学系研究科の森純一郎特任助教が開発し、近々公開する

「企業間つながり検索システム smeeet (SME=小さな会社と meet=出会うの造語)」は、中小・ベンチャー企業の新たな出会いや、つながり候補の探索および選定を、サポートする機能を提供するものです。今回行った企業間の取引関係のネットワーク分析 (関東甲信越のケースでは、企業約 3 万社、取引数 7 万件を対象) や地域における聞き取り調査では、取引関係は既存の業種ごとに比較的閉じた関係が形成されており、仮に近隣地域に求めている技術を保有する企業があっても、それを見つけて出すことは容易ではない実態が明らかになりました。

比較的閉じている既存の取引関係をたどって紹介を受ける方法では、新事業に必要な技術や販路を持つ企業にたどりつくのに大変な困難

を伴います。今日ウェブ上に大量の企業情報が流れており、探索に利用することも可能です。しかし、Google など一般的な検索ツールでは、検索結果の適切な絞りこみが出来ないため、特に人員の少ない中小・ベンチャー企業では、それら膨大な検索結果の中から人手に頼って有用な情報を選び出すことは困難です。

本システムでは、企業間のつながり探索に目的を限定することで、探索ニーズに応じてつながり先候補群に優先順位を付けて抽出し、さらに当該候補群が持つ特徴や企業社会における位置取りをわかりやすく、簡潔に示す機能を提供しています。新たなつながりを形成しやすくすることで地域イノベーションの活性化をうながす、「知の爆発」時代に貢献するシステムです。

東京大学地域振興研究会H22総会

農商工連携で地域の活性化を

産学官連携による地域経済再生を目指すため、自治体のキーパーソン育成の目的で設立された「テクノロジー・リエゾン・フェロー研修制度」(以下、TLF)のネットワーク組織「東京大学地域振興研究会」の平成22年度総会がこのほど「農商工連携による地域活性化」をテーマに、産学連携プラザで開かれました。東京大学独自の制度として2000年から実施し、TLF研修生は今期で65名。派遣元の自治体で活躍する修了生ら約60名が参加し、今回も調査研究の成果が発表されました。

冒頭、影山産学連携本部長より「産学連携のキーパーソンとして活躍されている皆さんと再びディスカッションすることができ、またこの活動が広く認知されていることは非常に喜ばしい」と挨拶。来賓講演として、経済産業省経済産業政策局地域経済産業グループ地域経済産業政策課の小林弘幸氏から、農商工連携を

推進する立場で、74兆円という国内の食関連需要の中で9.4兆円しか農林漁業者に需要が回らない構造を指摘。103兆円規模の需要がある加工流通分をいかに農業者所得に還元できるかを念頭に、①事業者といえどもマーケットインの視点に立つ②栽培ノウハウなどで技術料をとる③農業者と商工業者のwin-winな関係構築が地域経済に波及しうる④農業経営で成功するためには農業以外のノウハウが重要——といった、農商工連携を進める上での貴重なご意見をいただきました。

基調講演として、農学生命科学研究科附属生態調和農学機構の二宮正士教授は「高い生産性や競争力、不安定な気象条件の下でも安定的な生産を求められる農業は複雑な課題を背負う。最大化から最適化へ移行するポイントは農業を科学すること。現場で如何にきちんとデータを取れるかが重要」と説き、実際にフィールドで行われている具体的な事例紹介がありました。



左から小林弘幸氏、二宮正士教授、平山隆之氏。それぞれの立場から貴重なご意見をいただきました

招待講演として、(独)新エネルギー産業技術総合開発機構(NEDO)技術開発推進部主幹の平山隆之氏からは、技術水準の向上、イノベーション推進を図るための技術の実用化開発へ向けた助成を行う立場からのアドバイスも含め、申請を促進する激励のお言葉をいただきました。

引き続き行われたTLF修了生の事例・調査研究報告では、各県から5例の発表がされた中で、(財)かがわ産業支援財団技術振興部長の末澤保彦氏(TLF第10期生)が農商工連携で生まれた県の地域資源であるオリーブ関連製品として「オリーブはまち」などの紹介で聴講者の関心を引いたのははじめ、茨城県生活環境部消防防災課課長補佐の高野佳樹氏(同2期生)からも産学官連携で高性能な新方式の中性子検出器の開発に成功した事例紹介がされました。

各分野で具体的な産学官連携を創出した研修の成果が披露され、TLF研修が指導的役割を果たす上で役立っていることがうかがわれました。



TLFのみなさん。社会のニーズを的確に捉え、産学連携を主宰できる実践力を身につけ、地域に貢献しています

2010業務改善総長賞表彰式

産学連携本部が総長賞を受賞



濱田総長より表彰状を受け取る峯崎主幹

PDCAサイクルを継続的に行うことで、全学的に業務の円滑な推進を図ることを目的に実施されている「2010年度業務改善総長賞表彰式」(主催=業務改善プロジェクト推進本部)がこのほど、安田講堂で開催されました。5年目となる今年度は31件の応募があり、その中から産学連携本部知的財産部と産学連携課企画チームによる業務改善テーマ「契約審査案件のシステム管理」が栄えある総長賞(国内研修)を受賞しました。講堂には教職員約400人が集まり、業務改善への意識の高さがうかがわれました。

受賞に当たり、メンバー代表である知的財産部の峯崎知的財産統括主幹から「契約審査の迅速化と新人職員の早期戦力化を主眼に、知的財産部と産学連携課企画チームが協力して、審査依頼メールの形式統一とOutlookによるシステム化を行いました。業務改善は本質的な課題の解決のための時間的な余裕を与えてくれます。今後は部局事務やパートナー企業にも改善の輪を広げてより実りある産学連携の実現に邁進していく所存です。この取り組みにより平成19年度から21年度にかけて約50%増加した業務量に十分対応できました」と成果が披露されました。

産学連携の進展を背景に共同研究契約は年々増加して平成21年度は1302件でした。これらの処理を中心とする産学連携本部での契約支援業務も増加しており、平成21年度は1440件にのびりました。今回受賞の対象となった取り組みは、このような多数の案件の効率的な処理を更に進めるものです。

濱田総長からは「日々の業務の工夫や気働き、かっこよくスマートに仕事が

できているかをしっかりと考えることで成果を生み出すと同時に、自分自身もより能力をつけていくきっかけになります。今後も全学的に業務改善を進めていきたいと思っておりますので、引き続きご協力をお願いします」と講話をいただきました。

受賞メンバーは以下の通り(敬称略)

- ・ 峯崎裕 (代表者)
(産学連携本部知的財産部の知的財産統括主幹)
- ・ 貴志万里子 (同知的財産統括主幹)
- ・ 板倉奈緒美 (産学連携課企画チーム係長)
- ・ 戒田洋平 (同一般職員)
- ・ 和田房子 (同一般職員)



後列左側より貴志万里子氏、峯崎裕氏、戒田洋平氏
前列左側より板倉奈緒美氏、和田房子氏

連絡先：産学連携本部 (本部産学連携課)
電話：内線22857 (外線03-5841-2857)
WEBサイト：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DU CR

検索

DU CR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo



2011年、最初に思ったこと

渡邊 雄一郎

総合文化研究科 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

元日ポストをあけて年賀状の束を手にとったとき、一番上に見えた字で正月から活をいれられた。恩師からの年賀状である。ひっくり返す前にだれかがわかる。字のインパクトである。

年末に研究室の大掃除で冷蔵庫からサンプルが出てきた。その字をみてもだれのものかわからなかった。最近学生とやりとりするなかで、ワープロで打ち出したものをもとに議論することが多いことを反省した。実験ノートの字をみても個性が感じられず、筆跡による個人特定ができなかったのである。一方の年賀状はというと振り分けをする中で、これは小学校、中学、あるいは高校時代の友人と判別できた。大学以降のつきあいの人はワープロ書きの宛名がおおく、分からなくなる。

ワープロの出現時期は私が博士論文を書く時期と重なった。本論文の多くは手書きだったが、要旨だけはワープロ書きと指定された。書き直しの事態がおこるとそれは大変であった。科学技術によって便利になったということである。

写真記録も楽になった。以前はネガフィルムを用いて、自分で現像、定着。暗室でその焼き付けを行ったうえで、墨で説明をいれた原稿をつくる。もう一度写真にして、論文用のデータが完成。発表もスライドであったので、原稿をもって写真屋さんをお願いする。締め切りや練習の期日から所要時間を考えて、早めに作業しなければならない。今はデジカメでとれば、すぐにパワーポイントに貼り込めて即、発表に向かえる。どちらが良いのか、今便利になった分ゆとりができたのか、余った時間を何につかっているのかなど思い悩んでしまう。昔は一枚の写真データでもこれを示したいなどの思いをもちながら暗室作業を行い、論文の論理構成を考えながら一字一字を書いた。一枚のデータ、一枚の原稿を作る過程に苦労も反省も展望も織り込まれていた。クリック作業で全てが進む時代、ゆとりが生まれ、精神的に豊かになったと思いたい。

今は経済活動を活発にする、消費を活性化するための新商品開発が民間で求められている。ただ科学技術は経営のためだけのものなのだろうか。利便性がどのような結果をもたらすかを、経済的な観点だけでなく、人間生活の豊かさに対する中長期的な影響も判断対象とする事が必要ではないかと感じる。正月に子どもがお年玉をもらった購買力?を見透かしたように、1月中旬に新製品として3D対応のゲーム機をだしてくることに苛立たしさを感じながら書き殴ってしまった。

★科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>



第15回 現代に至るリユース、そして

17世紀当時の江戸は需要拡大による急速な発展を遂げ、世界最大の都市となったにも拘らず、欧州の大都市よりも清潔で美しい町だったようです。その理由は江戸が理想的なリユース・リサイクルの町であったから。とりわけ「リユース」の精神が強かったようで、モノが壊れても修理を重ねて使い尽くしていたとか。

この「使い尽くす」という精神はノートPCリユース事業でも大変重要なポイントであり、学内の資産を有効活用して、学生への教育研究支援を行うと共に無駄にノートPCを廃棄せず、再利用することで、学内に循環型社会を構築し、地球環境に貢献…。つまり、経済支援をすると共にゴミの減量を目的としているわけです。でもこれは、ノートPCに限った事ではありません。例えば仕事での必需品である机・椅子等の什器類はリユースの典型です。

東大のポータルサイトには『一斉通知』というコーナーがありますが、そこに不用となったモノ若しくは必要な(探している)モノを掲載し、学内募集を行えます。まだまだ掲載数は少ないのですが、什器類を掲載すると必ずと言っていい程、教職員から問合せがあります。こちらの「わ」も拡がりを見せれば、大きなリユースの「わ」が出来あがり、ゴミの減量にも繋がるという事は言うまでもありません。

江戸の人々がゴミの減量のためにリユースをしていたかどうかは分かりませんが、「モノを使い尽くす」という精神が、自然とリユース社会を生み出し、その結果「美しい町づくり」とリンクしたのではないのでしょうか。モノが溢れ返った現代に江戸時代の精神を求めるのは無理かもしれませんが、財政的にも厳しい今だからこそ、リユースの「わ」を上げませんか？(小)

☆12月各部局ご提供PC☆

医学部 1台 理学部 2台 農学部 1台 教養学部 1台
宇宙線研究所 1台 先端科学技術研究センター 1台

以上7台のノートPCは5回目の募集時に利用させていただきます。どうもありがとうございました。引き続きよろしく願いたします。

- 問い合わせ先: ノートPCリユースオフィス (本部資産管理部資産課内)
E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp
URL: <http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/>
内線: 22135 (担当 小川・高橋・戸田)
- ノートPC回収先: 美津野商事株式会社システム事業部
E-mail: reuse@mizuno.net (担当 川崎・石井)
電話: 03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180

ワタシのオシゴト 第59回

Rings around the UT

経営支援部企画課
古谷 博行さん

こちら企画課。「行動シナリオ」読んでますか？



役員のお考えに直接接するチャンスも！（時々）。「やる気」がドクドク注入されているところ。左はご存知、前田理事（副学長）

【ワタシのオシゴト自問自答】

Q. 今の仕事をひとりで。

A. 大学経営陣のサポートです。特に濱田総長の将来計画「行動シナリオ FOREST2015」の普及や実施、またそのための調整に力を注いでいます。

Q. 調整というと？

A. 行動シナリオ実現のためには学内の様々な構成員の力が重要です。そのため、部署を越えて共同作業の依頼、情報提供のお願い等の調整を行っているのです。4月に異動してきてからいろいろな部署の担当者の名前と顔を覚えるのにちょっと苦労しました。

Q. 異動前の部署は？

A. 数物連携宇宙研究機構で2年間外国人研究者のサポートを行っていました。より良い研究環境を作るために現場で課題をひとつひとつ解決していく作業に魅了された私。異動してからは全学的な視点から課題に取り組むことになったわけですが、どちらも変わらず、周りの人のご協力や助けがあってこそ行える業務だと実感しています。

Q. 最後に経営支援

部2年目となる今年

のモットーを。
A. 「気働き」、
「スピード」、
そして「自分の色を出す」の三兎追



「東大」を背に企画課のメンバーと。いつも本当にお世話になっています。

得意ワザ：嫌なことは忘れる

自分の性格：あっさりうす塩

次回執筆者のご指名：富松 理さん

次回執筆者との関係：一宿三飯の恩人

次回執筆者の紹介：牧場ライフを紹介してください！

コミュニケーションセンターだより No.72

■新商品ご案内

コミュニケーションセンターに新しい書籍が入荷しました！

★AERAムック「東大へ行こう。」

東大とアエラが共同編集したムック、「東大へ行こう。」卒業生の進路や、サークル等、学生生活。東大トリビアに至るまで、まるごと1冊東大ガイドブック！！

コミュニケーションセンターでは、学校見学の女子高生に人気です。現役の女子学生の表紙が目を引きまます★

★総合研究博物館図録

「ヒマラヤ・ホットスポット-東京大学ヒマラヤ植物調査50周年」

総合研究博物館にて、昨年12月18日より一般公開されている「ヒマラヤ・ホットスポット-東京大学ヒマラヤ植物調査50周年」の図録です。一般公開は2011年2月27日まで。

博物館へ行かれた際はぜひ併せてご覧下さい！！



(左)「東大へ行こう。」
¥ 880(税込)

(右)「ヒマラヤ・ホットスポット-東京大学ヒマラヤ植物調査50周年」
¥3,780(税込)

■スタッフオススメ商品紹介★



文科Ⅱ類1年
中川卓也

初めましてこんにちは！
UTCCスタッフの中川です。
文科Ⅱ類の1年で、水泳部に入っています。僕の一押し商品は「体力式アミノ酸」です！水泳部では、週に6日、朝6時から練習があります。その前のエネルギー補給として飲んだり、夜、1日の疲れをとって翌朝から頑張りたい時などに活用しています。ハードなスポーツをしている方から健康維持の目的での軽い運動、また、日常生活での疲労回復にとっても役に立ちます！是非一度試してみてください！！

担当：UTCC三浦



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：00～18：00

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp



～総長通信～

President's Improvisation

拡大版

Vol.3

このコーナーでは、日々の活動の中で、総長が考えておられることを皆さんにお知らせしていきます



濱田純一東京大学総長・緒方貞子JICA理事長 公開対談

10月18日（月）10時から、東京大学と国際協力機構（JICA）は、開発途上地域への国際協力事業の質の向上及び国際貢献、学術研究及び教育の発展に寄与することを目的に、小柴ホールにおいて調印式を行い、連携協定を締結しました。

また、調印式に引き続き、同ホールにおいて、本連携協定の締結を記念して、濱田総長と緒方理事長の公開対談が開催されました。公開対談には、本学の学生約160人が出席し、後半の質疑応答では、出席した学生たちから、積極的に質問が飛び交い、グローバル化する世界や現在の日本の社会状況の中で、グローバルな人材としてどうあるべきかなどについて、熱い議論が交わされました。

今回は、～総長通信～拡大版と題して、濱田総長と緒方さんの対談の様態をご紹介します。

濱田 総長就任以来、私は「東京大学を『世界を担う知の拠点』にしていく。『知の公共性』をもっと発揮していく。そのために東大生にはタフであってほしい。さらには『国境なき東大生』になってほしい」と述べてきました。ですから、本日、「国境なき日本人」のシンボルともいえる緒方貞子さんと対談させていただけることを大変うれしく思っています。対談ではありませんが、今日は緒方さんのお話をいろいろと引き出したいと思っています。

それでは最初に、いま多くの日本人が気にしているであろうこと、すなわち、「現在、世界の中での日本の位置や役割は、以前と比べてどのように変わってきているのか。また、これからの時代、日本は世界からどのような役割を期待されているのか」ということをお聞かせいただけますか？

緒方 まず、私は濱田総長が「タフな東大生」「国境なき東大生」という言葉を掲げておられることをうかがって、「大変ショッキングな東大生像を抱いていらっしゃるな」と感じました。それだけ「一生懸命でいらっしゃるのだな」とも思い、とても感銘を受けております。

最初のご質問に関しまして、私の経験を振り返りながら、思いを申し上げたいと思います……日本の敗戦後は、とに

かく「何とか立ち直りたい」ということで、あらゆる努力をした時代でありました。すごく日本が努力をした時代だったということ。ここにいる皆さんも歴史を勉強して先輩方の努力を実感していただきたいと思っています。そんな時代が50、60、70年代と続きまして、海外では「日本に見習え」といった声も多々ありました。私自身は聖心女子大学を卒業して米国に渡って、初めて広い世界を見、「日本はどのような国になれば良いのだろうか」という意識を持ちました。当時、日本人留学生の数は少なかったんですが、皆、世界に目を向けていて、すごい意気込みがありました。当時の日本は国際開発援助を受ける立場にありましたが、一方で、60年代から海外への開発援助をする方向に進み始めたんです。その後、80年代に入ると日本は経済的最盛期を迎えます。ニューヨークの中心街の建物を持ち、ハワイのウオーターフロントのホテルなども持つというような世界経済の中心的な国になりました。しかし、それ以後はトップのポジションを保ちきれなくなり、最近では世界における日本経済の順位は下がってきていますね。海外への開発援助もトップではないと思います。

それでは、日本は本当にダメな国になってしまったのか……外から見て、ダメな国に見えるわけではないと思いますよ。ただ、「日本は以前よりも『内向き』になって

いる」とはよく言われますね。「一体、日本はどうしているんですか？」という質問をずいぶん受けるようになってしまいました。

現代は、国を越えたネットワークの時代になってきています。グローバル化ですね。グローバル化の時代というのは、あらゆる意味でのネットワーク化が進み、国と国の間だけでなく、人と人のネットワークが非常に大きな役割を果たす時代です。日本はそのような時代に対応できているのか。現状では「あまり対応できていない」と言わざるを得ません。内向きだけでは世界の中で生きていけない。世界から離れて日本だけが繁栄することはできないのです。そのような状況の中で、大学には「将来、世界に雄飛する人材を育てる」という大きな役割があります。だからこそ、総長は「国境なき東大生」というメッセージを掲げられたのだと思います。そもそも、日本という国は国境だらけ、壁だらけの国ですね。それは日本の大きな欠陥なんですけど、そんな日本から飛び出して「国境のない世界」を作る先人になってほしいと、総長自ら、おっしゃっている。これは大変なことだと思います。ここにいる皆さんは、この総長のお言葉を聞いて「総長は夢を見ておられる」と思うのか、それとも「それは言われなくても分かっている」と思うのか……そのことを総長に、あるいは皆さんにうかがいたいと思います。

濱田 ありがとうございます。この点は私が間接的に答えるよりも学生の皆さんから答えてもらいましょう。はい。

学生A 医学系研究科博士課程の者です。私は小さい頃から国と国よりも人と人のネットワークが大事だと思っていましたが、日本での教育を受ける過程で、どちらかといえば、それを否定されてきた印象があります。しかし、グローバル化ともなると、自分が小さい頃に思い描いていた方向に社会が進んでいるなと思いついていてるところです。私の専門である「医療・健康」といった分野でも、政府やWHOばかりでなく、NPO、企業、個人といったレベルでの活動や繋がりが大事になってきているなと感じています。

濱田 緒方さんがおっしゃった「国際社会からの日本への期待」はどんなことに対する期待なのか。緒方さんのお話の中で、すでにある程度、答えはいただいていると思いますが、これは必ずしも「経済的強国になれ」ということではないですね。世界的な相互依存を背景にして、「人と人との関係をどう作っていくか」がポイントなのだろうと思います。これは、皆さんに期待している「タフな東大生」、「国境なき東大生」という、人間としての在り方や生き方にも関わってくるのだと思います。そこで、世界が日本にがんばってほしいと思っている、そのポイントをもう一度、



お話しいただけますでしょうか？

緒方 ひと頃、『Japan as No.1』（Ezra F. Vogel著・新版は阪急コミュニケーションズ刊）という題名の本がヒットして、その言葉が広まったことがありました。今ではほとんど聞くことない言葉ですね。当時と比べると、日本はずいぶんと経済的な順位を下げ続けています。「どうして一番でなければいけないんですか？」という質問が最近、ちょっと有名になりましたが（笑）、初めから「ナンバー5で良い」と思い始めたら、ナンバー10まで落ちてしまうというものではないかと思えます。

戦後日本は、一時はナンバー1にもなっていて、それだけの土台をちゃんと築いてきた国なんですね。そういう土台を崩してはいけないと考えています。これは経済力などの実質的な部分だけでなく、イメージにおいても言えることですね。世界では日本に対して「きちっとしたモノを作り、経済的に立派な国になり、世界を指導できる国になった」というイメージをまだ持っています。それを壊してはいけない。皆さんの世代には、世界からのそういう期待に答える義務があると思うんですね。その義務を負いながら、「自他を理解する」ということが大切だと思います。自分はどうな立ち位置にあり、何をできる可能性があるんだろうか。そして、他はどこにあり、何を求めているんだろうか。そのように自他の関係を見つめていく必要があります。グローバル化の時代は「自分ひとりだけではナンバー1になれない」ということがはっきりとしている時代ですから、そのような自他の交流の重要性が一層大きくなってきているということを知っていただきたいと思うわけです。そういう意味で、大学は「交流の大きな動き」を作っていく場になるのではないかと思います。

濱田 「自他の関係をしっかり見つめていく」ということ。とても良い言葉をうかがったと思います。そこから、「グローバルな人材とは何か」という話に入っていきたいと思います。従来の日本では、「国際化」というと「英語が話せる」さらには「海外からの進んだ知識を受け入れる」といったイメージが強かったですね。しかし、すべての日本人がそう思っていたわけではなく、緒方さんをはじめ、「自分たちがコントリビュートしていくんだ」という強い意識を持って世界で活躍してこられた方もたくさんいらっしゃいます。私には「そのような先駆的な方々ばかりでなく、普通の東大生たちも強い意識を持って世界で活躍してほしい」という思いがあるんです。そこで、緒方さんにうかがいたいのですが、グローバルに活躍できる人材、国を越えて「人と人の関係」を築いて新たな世界・時代を作っていけるような人材というと、どのようなイメージを持っていますか？ 緒方さんが一言で言うならば「私を見てください」ということになるのかもしれませんが、そういうご自身のご経験も踏まえて、お話しいただけますでしょうか？

緒方 昔、「何でも見てやろう」という言葉が流行ったことがありました。これは、ベ平連【編集部註：ベトナムに平和を！市民連合】の小田実さんの著書（『何でも見てやろう』小田実著・講談社文庫刊）の題名から流行った言葉ですが、実際、敗戦後の貧しい日本から世界に飛び出した人々には、「何でも見てやろう」という意識の高さとハングリー精神があったんです。

私自身は、いわば「状況順応型」で、与えられたことに対して「これはやってやるか」ということで今まで進んでまいりました。初めから日本の開発援助機関の責任者になるかと考えていたわけではありませんし、国連に行って難民高等弁務官になろうかと思っていたわけでもありません。もちろん、過去のそれぞれの局面でかなりがんばりはした

と思いますが、それは新しいことをやるのが面白かったからでした。ですので、皆さんもcuriosity（好奇心）というものをずっと持ち続けていただきたいと思います。

濱田 緒方さんは、新しい仕事を任せられた時、新しい課題にぶつかった時、一種の「何でも見てやろう」精神でやってこられた。curiosity（好奇心）の大切さをおっしゃいました。新しいことに直面した時に「何だろう。どうしてだろう」と思う姿勢は皆さんにも原点として持ってもらいたいと思います。これは「タフな東大生」という以前に、勉強する・研究する際に大切なことですね。新鮮なものを求める気持ちを常に持ってもらいたい。ただ、今の時代を生きていくために好奇心だけでは乗り越えられないことも多いと思います。緒方さんは様々な修羅場をくぐって来られたと思うんです。思いがけないところから「弾」が飛んでくる（本当の弾が飛んできたかもしれません）、あるいは思いがけないところで、どうにも進めなくなるような障壁にぶつかる。そういった経験もずいぶん重ねられてきたんじゃないかと思うんですが、そこは好奇心+ α で乗り越えられたのではないかと思います。その α は？ そういう時に何が大事なのでしょう？

緒方 そういう経験はたくさんいたしました。難民高等弁務官は人の命を預かる仕事でしたから。本来ならば、人の命は国家が預かるものですね。しかし、その時々々の国家の状況によって、時には国家が原因となって、命の危機を感じて人々は逃げるわけです。難民高等弁務官の仕事はそういう人々の保護と問題解決にあたるという非常に難しい仕事でした。この仕事においては「人々の状況をよく理解すること」がとても大切なんです。自分のできる範囲をよく知り、相手を理解することですね。そのためには言葉の問題がとても大きい。自分で自分を理解するためにも、自分の考えを表現するためにも、そして、相手を理解するためにも、言葉は大切です。日本人は「言葉は自分を理解し、相手を理解するための根本である」ということをもっと考えるべきだと思いますね。ところが、日本の英語教育はあんなに時間をかけても効果が出ない。最近、ダライ・ラマ氏が日本にいらっしゃいましたが、「日本に対するアドバイスは何ですか？」と聞いたところ、「Study English.」とおっしゃったそうです。これには皆、びっくりしたんですが、よく考えれば「たしかにその通りかもしれない」、と。日本人は国際語である英語に対する本当の努力をなぜしてこなかったのだろうか。それをもっと考えるべきですね。

それから、「私は何をしたら良いのでしょうか？」と聞いてくる方がよくいらっしゃいます。その質問は自問しなければならぬ問題ではないかと思うんです。また、米国の大学に来た日本人留学生は、先生に「どういう内容の論文を書けば良いのでしょうか？」という相談をしてることが多いそうです。これも自問しなければならぬ問題ですね。そのような「自主性」と言葉は関連性があるようにも思います。

濱田 早いもので、そろそろ対談の時間も終わりに近づいてきました。「これだけは伝えておきたい」ということをそれぞれ申し上げるのが私たちに与えられたミッションです。本来でしたら、緒方さんからそれをおっしゃっていただくべきだろうと思いますが、考えていただく時間をということで、私のほうから先に申し上げたいと思います。

この催しを行うにあたって、いろいろな方からメッセージをいただきました。そのひとりに、東大経済学部を卒業して、現在、海外青年協力隊としてモザンビークで活躍しておられる方がおられます。彼はメッセージの中で「相手

を理解したうえで行動することの大切さ」をしっかりと伝えてくれていますので、少し読ませていただこうと思います。

【たとえば、私がモザンビークのストリートチルドレンに対して教育の重要性を伝えようとする時のことです。単に「勉強して学校を出れば将来就く仕事の幅も広がるし、世界も広がるよ」といった知識を伝えたところで、彼らの行動は変わりません。それは、彼らには彼らの理由があるからです。たとえば、学校に行っても先生は来ない。自分は親に宿題を教えてもらえないから学校で馬鹿にされる。学校に行かないで洗車の仕事をすれば必ず報酬がもらえる……そういった子供たちが言う理由を考えて整理をします。そして、自分が伝えたいことをどうやって子供たちに伝えれば良いのかをしっかりと考えるのです。】

そんなふうに彼は言っています。まず、相手を理解する。そのうえで、自分が伝えたいことを、伝え方を考えていく……学生がタフになるプロセスとしてはそれが必要だと私は思います。相手を理解することが出発点だと言うこと。その大切さをメッセージとして皆さんにおくりたいと思います。では、緒方さん、お願いいたします。

緒方 今のお話をうかがって思うことは「協力隊員として『学ぶ』ことはとても多い」ということですね。自分と違った環境にいる人々と知り合う経験は本当に大きなものだと思います。今の隊員のお話は「何かを学び、人々を理解する」という模範的なお話ですね。実は、これと同様の状況は、すでに大学の中にあるのではないかと思います。大学には、それぞれ違うところからやってきた留学生や日本人学生がたくさんいらっしゃるのではないですか。そのような環境をどう活用するかが大切なのだと思います。

濱田 ありがとうございます。それでは、このまま、会場の皆さんからの質問を受け付けたいと思います。どうぞ。

学生 B 農学生命科学研究科の学生です。先日、COP10【編集部註：生物多様性条約第10回締約国会議】に出席させていただいたんですが、世界中からいろいろな方が出席されていました。そこで印象的だったのは「日本人出席者の発言の少なさ」です。これには英語力の問題もあると思いますが、それと同時に、あのような場に出席する人として考えるべき姿勢というものがあるのではないかと思います。緒方さんは、どのようにお考えですか？

緒方 日本人出席者の発言が少ない……これには特に驚きませんね。いろいろな会議で、よく言われていることですから。日本人の好奇心がなくなってしまったのか……よく言われることなので、とても気になることですが、ただ、



答えはありません。英語の問題だけではないだろうとは思いますが。

濱田 今の話と同様の感想を持っている人はいますか？

学生 C 理科Ⅱ類1年の者です。私は「何もないところで『面白い』と思ったことに対して好奇心は生まれる」と思っています。ですから、このJICAとの提携などのように周りからのサポートが固すぎると学生の視点がひとつの流れに乗ってしまう気がします。昨年、東大生協の書籍売り場で『思考の整理学』（外山滋比古著・ちくま文庫刊）がよく売れたということからも分かりますが、さきほど緒方さんから「どうしたらいいんですか？」と聞く若者が多いというお話があったように、ハウトゥーを求める学生がすごく多いことだと思います。自分で物事を考える状態にある者を周りに固めてしまうという意味で、JICAとの提携もマイナスな部分があると思います。完全に自由な状況を作り出して学生に主体を預けることも必要だと思うんですが、その点に関してどうお考えですか？

濱田 大学側の感覚から言えば、まったくその通りだと思います。私は、今の学生たちが必ずしも元気がないと思っているわけではありません。元気が良い人は相変わらず元気が良い。ただ、そういう元気な人以外の学生たちはちょっと小さくなってきているのかなという思いがあります。その原因として、学生個人の問題だけでなく、社会がちょっと硬くなっているからではないかと思っています。

今、「サポートが固い」という言葉を聞いて、「社会の硬さ」を思い浮かべました。たとえば、「一度、海外に行くと、ある程度の年齢を過ぎてしまうと、もう就職できない」とか、「せっかく海外でいろいろな経験を積んできたのに企業がそれをうまく生かしてくれない」といったことです。私たちの時代と比べると、今はそういう「社会の硬さ」が大変目立ちます。ですから、大学としては「皆、もっと勝手にやれよ」と皆さんに言いたいと思いますし、同時に、社会に対して「もうちょっと荒っぽい組織の動きをやっていったらどうですか」と訴えたいと思っています。

さらに、大学としての責任を考えると、そういう荒っぽい活躍をした皆さんがどうにもなくなってきたときに、もう一度サポートしたいと考えています。「授業料はタダで良いから、もう一度、勉強したら、どう？」といったことを言いたい。今、ここであまり言うとも、良くないかな

（笑）。大学は皆が自由にのびのび活躍するために支えていきたいと考えています。

緒方 ぜひ、大学側からそういう雰囲気を広めていただきたいと思います。就職のことも問題になっていますね。



3年生になったら就職活動をしなければならないとか、卒業してから3年間だけ新卒とみなすとかね。そんな硬い就職状況は考えられない気もしますが、たぶんそれが実態なんだろうと思います。就職の問題に関してはもう少し企業に訴えかける必要があると思いますね。就職時期の問題のみならず、たとえば、全員が同じスーツを着て面接に行くとか。私には考えられないことです。もちろん、日本人と米国人の文化の違いというものもありますが……米国の大学のセミナーで、米国人学生は考える前に手を挙げてしゃべり始めます。日本人学生は考えて考えて手を挙げた頃にはチャンスを逸している。積極的に個性的な米国人と控えめで協調性のある日本人。国民性の違いですね。

濱田 就職早期化の問題は非常に深刻です。「大学に在る間にしっかり学ぶ」という面でも問題ですし、「海外での経験を積む」という面でも障害になっていると思います。これに関しては、今、大学も強く働きかけていますし、文部科学大臣もぜひぶん動いてくれていますので、少し変化が出てくるのではないかと考えています。面接に同じスーツで行くという話も、たしかに現在は極端ですね。ひと月くらい前でしたか、JALの昔の入社式の写真が雑誌に出ていましたが、それを見ると、皆、好き勝手な服装をしているんですね。どうも今の社会は画一化が進み過ぎているのではないかと思っています。ですから、「もう一度、大学の側から社会を粗くしてやらなきゃいけない」という気がしているところです。それから、日本人はとことん考えてから発言するのでタイミングが遅れるというお話ですが、そんな日本人の特質をうまく生かすコミュニケーションができればいいと思います。相手をうまく理解して切り返す、あるいは相手を尊重しながら次のステップに持っていく……そういう力になればいいと思いますね。それはそれで大変なことなんです。

学生 D 農学生命科学研究科の修士課程2年生です。先ほどから「外に目を向けよう」というお話が続いていますが、私としては「内向きではなぜいけないのかな」と感じています。私自身、卒論はバングラデシュのことを、修士論文はアマゾンのことを書いているので、志向としては外向きなほうなんです。興味は内向きの人の場合は、それはそれで良いのではないかなと思います。平安時代の日本は内向きでしたが、素晴らしい文化を残しましたし、現在ならば、アニメなどの個人的な趣向が産業になりつつあります。内向きの姿勢が別のものを産み出す可能性もあると思うんですが、その点はどうお考えでしょうか？

緒方 それはたしかにそうで、素晴らしい文学を産み出すことも大切ですね。しかし、現在の日本は社会全体が内向きの傾向にあります。これが続いていくと、世界の中で日本は生き残れないと思いますね。それが世界経済の実態であり、経済の裏にある情報社会の実態ですから。私はよく「繁栄の孤島にはなれないよ」と言うんです。内にこもって良いものを産み出す方も必要だと思いますが、社会全体としてはそういうわけにはいきませんね。

濱田 私も同じような思いです。平安時代なら内向きで良かったんですが、現代の私たちの生活は否応なしに世界の中に関連づけられている。それから、「国際化」というものは、ただ、他の国の人々と付き合うことだけではなくて、自分とは違った世界、価値観、考え方と付き合うことだと思っています。これだけ時代が変化しているんですから、新しい課題がどんどん出てきますね。そういう時には選択肢が多ければ多いほど良い。発想の仕方が多様であるほど良い。海外経験のある人が最終的に国内で英語を使わない

仕事をしていても良いと思うんですが、その場合においても、外を知ることは、発想、考え方、知識という面で引き出しをたくさん持つための機会になるのではないかと思います。

学生 E 柏キャンパスから参りました新領域創成科学研究科の学生です。先ほど緒方さんからUNHCR【編集部註：国連難民高等弁務官事務所】のお話もあったので、紛争問題や人権侵害の問題に関して質問させていただきたいと思います。私は以前、東ティモールに3年ほど赴任していましたが、30年弱の間、紛争が続いた東ティモールで日本は積極的に役割を果たしていたとは言い難い状況でした。現在も世界の様々な地域で人権侵害などが起こっていますが、特に日本にはどのような役割が期待されているのか、ご意見をうかがえればと思います。

緒方 それは日本人の問題でもあるし、個人の問題でもありますね。あなたが東ティモールに3年もいらしたということは、素晴らしい経験をされたんだと思います。東ティモールの人々に貢献をされたでしょうし、ご自分でもいろいろと学ばれたでしょう……先ほどの協力隊の話。日本の国として、協力隊は相当大きな貢献ツールだと思っています。これは他の国の方々も「ぜひやりたい」とおっしゃっています。若いうちに開発途上国に行って人々と交わりながらボランティアで貢献してくることは大変なことですが、現在は特に学校の先生、教育の現場におられる方に、多数協力隊に参加してほしいと感じていて、そのことをいろいろな知事方をお願いしています。教育の現場におられる方がそういう多様な経験を積むことは、相手の国やご自身のためばかりでなく、そういう経験豊かな先生に教わる日本の子供たちにとって非常に大事なことなんですね。最近では人権に関する考え方も、西欧的な人権、「個のうえに立った人権」だけでなく、もう少し広い視野で見た「人間の安全保障」といった考え方もだんだん広がってきていて、現在、とても注目されています。国際貢献という意味で言いますと、日本の場合は軍事的な形での貢献ではなく、平和憲法のもとでの外交、知的交流、奉仕などの貢献が求められているのだと思います。若い方々にはそういう活動に積極的な意義を感じていただきたいと期待しています。大学はそういうことを話し合うための大切な場。皆さん、どうぞ、誘いあっているいろいろなところに行ってください。いろいろな経験をしてください。そして、そういう経験を話し合う形で広めてください。私のお願いはそれに尽きます。

濱田 緒方さんの思いがだいぶ皆さんに伝わってきたと思います。では、次、どうぞ。

学生 F 工学系研究科社会基盤専攻の者です。ぼくは昨年、アジア開発銀行にインターンに行っていたんですが、現在、国境を越えて協力しようという人たちがいる一方で、ナショナリズムの問題、つまり、尖閣諸島の問題や石油獲得のために各国がしのぎを削って争い合う状況などがあることに矛盾を感じています。ぼく自身としては国境を取っ払ってやっていきたいという思いがあるんですが、ナショナリズムによる様々なリスクがある中で、どのように国境を越えてやっていけば良いのか、お考えをお聞かせいただければと思います。

濱田 たしかに、尖閣問題なども含めて、ある争点で他国とぶつかることはあります。そういう時はこちらが正しいと思うことをはっきり言うべきだと思います。ただ、そこで付き合いを終わらせないということが大切です。国際関係だけでなく、人と人との関係もそうですが、ケンカをしても長く顔を合わせ続けられれば、必ず別の接点が出てき

きます。ですから、あるひとつの争点だけが争点だと思いません。ですから、あるひとつの争点だけが争点だと思いません。ですから、あるひとつの争点だけが争点だと思いません。

緒方 おっしゃるとおりですね。非常に難しい問題を提起されましたが、どんな国でも経済的に順調に伸びていくことを、また、政治的に安定することを望んでいるんだと思います。しかし、多くの国が内側に矛盾を抱えています。たとえば、中国。たまたま尖閣問題は日本との間で起こりましたが、激しく成長し、激しく大国に戻ろうとする中で様々な矛盾が生まれてきています。私は6月に中国に行きましたし、ずいぶん勉強もしました。中国の指導者の中には「まだ、中国の国内に貧困はある。しかし、自国に貧困があるからといって世界の他の貧困地域、アフリカなどをまったく無視するわけにもいかない。何かしなければいけない時代になってきている」とおっしゃる方もおられます。そういった国内の矛盾は日本も抱えているはずですね。そんな状況の中で、どのようにして、最小限のリスクでなるべく多くの人々が満足できるような形に引っ張っていけば良いのか。政治家の仕事はとて大きいと思いますよ。そこにたどり着く道は多様であり、様々な工夫が必要ですね。いつも最高の答えがあるわけではありません。いくつかの可能な選択肢を選びながら出来る限り良い方向に引っ張っていくことが大切です。皆さんも様々な矛盾を乗り越えて世界で役に立っていただきたいと思っています。

学生 G 農学部獣医学専修の6年生です。先ほど「社会が硬くなっている」というお話がありましたが、その一方で、「選択の自由」が広がっていると私は感じております。興味があればいくらかでも外国に行ける環境にありますし、生活に困っている人も他国の貧困者と比べれば生活水準は高いと感じています。これは他国の人と交流して強く感じたことです。そのようなことを考えますと、ハングリー精神を持った人や外向きの人がもっと増えなければ、今後の日本がこれまでの地位を維持したり上を目指したりするのは非常に難しくなると感じておりますが、その点に関してはどうお考えでしょうか？

緒方 その通りだと思います。今、おっしゃったことで答えは尽きているのではないのでしょうか。そのお考えを、仕事の中で、あるいは様々な交流の中で実施していかれると大変良いと思います。

濱田 選択の自由があるのはおっしゃる通りだと思います。それなのに、たとえば、東大の学部入学者の女性比率は20%をなかなか越えない。これは「ガラスの天井があるからだ」と言われていますが、選択の自由があるはずの日本



社会のあちこちに「ガラスの天井」があるのかもしれませんが。そういうものを壊していかなければ、「選択の自由はあるはずなのに窮屈だ」という思いは抜けないでしょうね。

教員 A 教養学部の教員で生物学が専門です。東大は外国学校卒業学生特別選考を設けて留学生や帰国子女を受け入れています。とても良いことだと思います。しかし、彼らのほとんどは6月に卒業して9月に入学するというサイクルの人たちですね。4月に東大に入学するまで10ヶ月、待たなければならないわけです。特に帰国子女はその間に大手予備校に通って馴化教育を受けている人が多いんです。米国で高校を卒業して日本に帰ってきて、大手予備校の帰国子女クラスに入る。すると、「君たちは日本に来たんだから授業中に手を挙げてはいけないよ。授業が終わってから先生に聞きに行くようにしなさい」とアドバイスされるらしいです。東大に入学する頃には他の日本人学生とあまり変わらない個性になってしまうということですね。実際に帰国子女の東大生にそういう話を聞きました。先ほど、「多様な留学生と交流できる場として大学を活用するように」というお話がありましたが、それならば、彼らを10月に入学させれば良いのではないかと思います。大学は、外国で身に着いた習慣を持っている「フレッシュな状態」の帰国子女を受け入れて、heterogeneity（不均質性）の良さを学生に与えるような努力をしていただきたいと思います。

濱田 ありがとうございます。まったくおっしゃる通りだと思います。そもそも「日本人学生を受け入れる入試の在り方は現在のままで良いのかどうか」、それからグローバル30で留学生の受け入れの仕組みも変化してきていますので「今の学期の仕組みで良いのかどうか」といったこともシステム改革の問題として考えていこうと思っています。

学生 H 新領域創成科学研究科の者ですが、緒方さんに質問があります。先ほど「人々が満足できる生活をしていくようにするためには多様な道がある。いつも最高の答えがあるわけではない」とおっしゃっていましたが、開発援助や難民問題に従事されていてジレンマに直面した時、何を基準に行動されてきたのでしょうか？ その行動原理は何だったのでしょうか？

緒方 一言で言うならば「その人の命を守ること」です。人の生命を絶たないようにするということが最低の基準ですね。特に難民問題の時はそういうジレンマが現実の問題としてありました。生かすことですよ。

濱田 重い言葉だと思います。おそらく、今、この会場にいるほとんどの人にとって、現代は「生きることの重さ」をあらためて考える機会が少ない時代だと思います。そういう重い場面にたくさん直面してこられた緒方さんらしい言葉だったと思います。

それでは、そろそろ終わりにさせていただこうかと思えます。最後にもう一度、緒方さんからメッセージ、あるいは今日の感想などいただければと思いますが、その前に私のほうから、今回、寄せられた様々な方のコメントの中から、ひとつ、ご紹介したいと思います。私の感覚にぴったりくる言葉ですので、ご紹介しておきます。

【 私は8年間、オーストラリアにいましたので、いわゆる『タフな東大生』です。経験上、学生が積極的に海外体験・国際対応能力向上を行うには『情熱、度胸、相手を尊重できる器』があれば皆さんも成功できると信じています。 】

こういう経験談が寄せられています。それでは緒方さん、最後に、お願いいたします。

緒方 今日、こういう連携協定の機会に広く学生の方々とお話しできたのは大変幸いだったと思っています。どうしてJICAと東大が連携協定を結ぶことになったかと申しますと……実はエジプトと日本で大きな理工系の大学院を発足させたからなんです。日本の12の大学が協力してエジプトに理工系大学院を作る。正直言って、これは大変な事業でした。エジプト、ひいては北アフリカのためにということで、優秀な人材を育てていかなければ、なかなか本格的な発展はできませんから、とても大切な事業です。エジプトには日本の大学の力を信じている方々がいて、特に理工系分野においては現在の日本の力は海外から高く評価されているんです。JICAとしては「海外からの期待に答えるべく、よろしく願います」ということで、東大と協定を結ばせていただきました。東大の先生方もエジプトへ多数、お出かけいただくわけですから、東大のほうにも分かち合っていたくものがあると思いますので、よろしく願います。今日はありがとうございました。

濱田 今日の連携協定の締結を期して、東京大学はJICAと協力しながら、さらに国際的な場に活動を広げていきたいと思っています。

【2010年10月18日 東京大学・小柴ホールにて】



INFORMATION

募集

募集

本部学生支援課

平成 22 年度第 2 回「東京大学総長賞」の募集について

本学の学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、大学間の国際交流等の各分野において、「優れた評価を受けた」「優秀な成績を修めた」「本学の名誉を高めた」などの顕著な功績のあった個人又は団体に、総長が表彰を行う「東京大学総長賞」が平成 14 年度から設けられています。

この表彰は、「東京大学学生表彰選考会議」（以下「選考会議」という。）が選考にあたり、総長が表彰するものです。選考会議では、推薦された候補者の中からその内容を審査のうえ、「東京大学総長賞」として相応しいものが決定されます。

第 2 回（春）は学業を対象に募集し、推薦者は各学部長及び各研究科長・教育部の長のみとなります。また、第 2 回（春）授与式では、年間の授与者の中から特に優秀な者に対し、総長大賞が授与される予定です。

記

1. 申請書類：別記様式 1・2（個人・団体）の推薦書に必要事項を記入し、参考資料等を添付してください。なお、選考時の参考とするため、推薦理由欄には推薦にあたり留意された点（所見等）や選考経過等についても記入し、参考書類（写も可）を併せて添付してください。また、専門分野以外の本選考会議委員にもわかるように記述するようお願いいたします。

なお、今回の募集より、被推薦者自身が作成する候補者プロフィール（別記様式 3）が追加されております。

推薦者が決定いたしましたら作成させるよう併せてお願いいたします。

2. 推薦基準：以下のとおりです。
3. 提出期限：平成 23 年 3 月 3 日（木）17 時（必着）
4. 選考結果：3 月中旬に推薦者及び受賞者へご連絡します。
5. 授与式：平成 23 年 3 月 24 日（木）17 時より小柴ホール（理学部 1 号館）にて実施を予定しています。

東京大学学生表彰「東京大学総長賞」推薦基準

東京大学学生表彰実施要綱（平成 14 年 3 月 19 日総長裁定、平成 22 年 4 月 1 日改正）第 3 に基づき、推薦の基準を以下のとおりとする。

【推薦基準】

1. 第 1 回（秋）
 - a) 課外活動において、国内外の各種スポーツ、競技、演奏、展示、発表等で優秀な成績を収め、本学の名誉を高めた個人もしくは団体、または課外活動を支援し、課外活動の充実と振興に著しい貢献をした個人もしくは団体
 - b) 環境保全、災害救援、社会福祉、青少年育成、海外援助協力等の各種社会活動において、活動実績が認められ、他の学生の範となった個人もしくは団体、または社会的に優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人もしくは団体
 - c) 大学間の国際交流において、相互理解と友好関係を深め、本学の国際交流の発展に著しい貢献をした個人もしくは団体
 - d) その他、これらに準ずるもので、「東京大学総長賞」に相応しい貢献があった個人もしくは団体
2. 第 2 回（春）

学業において、研鑽に励み、他の学生の範となった個人もしくは団体、または学界等により優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体

【被推薦資格】

- a) 個人の推薦においては、特段の場合、連名も可とする。
- b) 在学中の活動実績や学業等が上記推薦基準に該当する者は、卒業または修了後 1 年以内に限り被推薦者となることができる。

【推薦者】

1. 推薦基準 1 については、自薦又は他薦とする。
2. 推薦基準 2 については、学部学生は学部長、大学院学生は研究科長・教育部の部長に限る。

【本件に関する問い合わせ】

本部学生支援課学生生活チーム

担当：辻角・山形（内線：22524・22514）

E-mail：gakuseiseikatsu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

お知らせ

退職教員の最終講義

学内広報では、今年度末をもって本学を退職される方々の最終講義のお知らせを掲載します。

医学系研究科・医学部

数間 恵子 教授

(健康科学・看護学専攻・臨床看護学講座)

成人看護学／緩和ケア看護学分野)

日時：3月18日(金) 15:00～16:30

会場：医学部2号館大講堂

演題：臨床看護－測定と評価、教育－30余年の歩み

公共政策大学院／経済学研究科・経済学部

金本 良嗣 教授

(公共政策学専攻・都市経済学、公共経済学)

日時：2月7日(月) 16:30～18:00

会場：経済学研究科棟 第1教室

演題：都市の経済分析と公共政策：40年の歩み

情報理工学系研究科

米澤 明憲 教授

(コンピュータ科学専攻)

日時：2月23日(水) 16:30～18:00

会場：工学部2号館1階213講義室

演題：「留学と研究」

*懇親会 2月23日(水) 19:00～(学生会館210号室)

事前登録は下記URLより

<http://www.yl.is.s.u-tokyo.ac.jp/plain/yer/>

情報理工学系研究科

武市 正人 教授

(数理情報学応用)

日時：2月28日(月) 16:00～17:30

会場：工学部11号館講堂

演題：実践躬行を目指して

社会科学研究所

仁田 道夫 教授

(附属社会調査・データアーカイブ研究センター)

日時：3月8日(火) 15:00～17:00

会場：経済学研究科学術交流棟・小島ホール

演題：非正規雇用をめぐる

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第535(1月5日)号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第535号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

山脇直司：サンデル教授に刺激されて、彼の語っていないこれからの正義の話をしよう

in Komaba

後藤則行：世界自然遺産へのいざない

伊藤徳也：中国の大学生にとって日本「動漫」とは

吉岡大二郎：物理は楽しい——遊び心でノーベル賞

尾中篤：2010年ノーベル化学賞『有機合成における

パラジウム触媒クロスカップリングの開発』

高橋英海：大学時代のセックスについての話とか

藤垣裕子：4S国際会議の駒場での開催

山口泰：第61回駒場祭について

〈時に沿って〉

宮下紘幸：Cognosce te ipsum

島田奈央：学生のころを振り返って

山本芳久：藁屑の輝き

竹内誠：光子と原子でミクロな世界を見る・操る

神子島健：十年、過去・現在・未来

——女性国際戦犯法廷のこと

小川浩之：英語・アーカイブ・チャイナタウン

長谷川宗良：収差

選抜学生コンサート・オーディション

学部報委員会：コーナーストーン

お知らせ

情報基盤センター

「はじめての経済学論文・企業情報の探し方」ほか
“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ

講習会に参加して、論文の探し方や便利な文献管理ツールの使い方をマスターしましょう！

情報基盤センター図書館電子化部門では、“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※自宅からの利用方法はどのコースでも説明します。

■ 2/3 (木) 12:10 ~ 12:30 自宅から検索するには？
(20分のワンポイント講習会)

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCS アカウント認証による SSL-VPN Gateway サービスを紹介합니다。

■ 2/4 (金) 12:10 ~ 12:50 RefWorks クイックコース
(40分短縮バージョン) 【新コース】

基本機能だけに絞って、短時間で Web 版の文献管理ツール「RefWorks」の使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。(過去の「RefWorks を使うには？」コース参加者は受講不要)

■ 2/8 (火) 15:00 ~ 16:00 知っておきたい検索のコツ

「いつも自己流で検索しているけれど、もっといい検索方法があれば知りたい」という方におすすめのコース。

教わらなくても自分で簡単にできそうに見えて、意外と難しいのがキーワード検索です。どのように入力すれば欲しい情報が効率良く見つかるでしょうか。いろいろな検索の種類と、データベースごとに知っておくと便利な検索のコツを教えます。(扱うデータベースは当日の受講者により応相談。例：OPAC、CiNii、Web of Science、EBSCOhost、読売新聞、朝日新聞、医中誌 Web、PubMed)

■ 2/10 (木) 15:00 ~ 16:00

はじめての経済学論文・企業情報の探し方 【新コース】

初心者向け。経済学部以外の方も歓迎です。

経済学・経営学・ビジネス研究分野の文献データベース「Business Source Complete(EBSCOhost)」と、有価証券報告書を全文検索・閲覧できる国内企業情報データベース「eol」の基本的な検索方法を実習します。

■ 2/16 (水) 16:00 ~ 17:00

CiNii で国内の論文検索 & RefWorks ですっきり整理

国内論文の代表的なデータベース「CiNii」(サイニイ)の使い方をコンパクトに解説した後、著者名やタイトルなどの論文情報を CiNii から Web 版の文献管理ツール「RefWorks」に取り込み、参考文献リストの自動作成を実習します。

■ 2/18 (金) 15:00 ~ 16:30 Web で文献の「検索」から「整理」まで (Web of Science & EndNote Web)

前半は、全分野の主要な学術雑誌(約 11,000 誌)に掲載された論文のデータベース「Web of Science」の基本的な検索方法の実習です。

後半は、Web 版の文献管理ツール「EndNote Web」の利用方法を説明します。

Web of Science (前半 30 分) のみ、EndNote Web (後半 60 分) のみの受講も可能です。



月	火	水	木	金
	2/1	2/2	2/3 12:10-12:30 自宅から 検索する には	2/4 12:10-12:50 RefWorks クイック コース
2/7	2/8 15:00-16:00 知っておき たい検索の コツ	2/9	2/10 15:00-16:00 はじめての 経済学論文 ・企業情報 の探し方	2/11
2/14	2/15	2/16 16:00-17:00 CiNii & RefWorks	2/17	2/18 15:00-16:30 Web of Science & EndNote Web
2/21	2/22	2/23	2/24	2/25
2/28				

●会場：本郷キャンパス総合図書館 1 階講習会コーナー

●参加費：無料

●予約不要 各回先着 12 名。直接ご来場ください。

●ご希望の日時・内容でオーダーメイド講習！

オーダーメイドの講習会もやっています。(無料)
「参加したいけど予定が合わない」「自分にぴったりのコースがない」という方、ご相談に応じます。学生だけでも、どのキャンパスの方でも OK。お申込みください。
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

**論文の探し方を
オーダーメイド
講習します**

！これで論文探しが効率 UP!! レポート・卒論/修論/博論に
！ご希望の日時・場所・内容で
！授業の1コマ・ゼミ中間の勉強会などに

講習内容の例

- ・ はじめての論文の探し方 OPAC, CNIL, Web of Science
- ・ 専門データベースの使い方 医中誌 Web, PubMed, 経済系、法学系、工学系、人文系など
- ・ Web 版の文献管理ツールの使い方 RefWorks, EndNote Web
- ・ 新聞記事の探し方 毎日新聞、読売新聞、読売新聞、海外の新聞
- ・ 自宅からの利用方法 などなど...

お申込み方法 

メールでご相談ください。
・ 希望日時 (講義卒業まで 平日 9:00 ~ 17:00 の間で)
・ 講習会場 (総合図書館講習会コーナーを使用することもできます。)

過去の講習例

学際情報学府、文学部、医学部、工学部、農学部、教育学部、農学部、柏、教養学部、駒場3キャンパス、ほか

※本キャンパス以外でも、学生だけでOK

総合図書館講習会コーナー
Windows 端末14台
iPad ジェネタラ

※パソコンを使った学習形式
※東京大学にご所属の方ならどこでもお申込みできます。

情報基盤センター学術情報リテラシー係 TEL: 03-5841-2649(内線:22649)
literacy@lib.u-tokyo.ac.jp <http://www.dl.litc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shucchu.html>

● Litetopi メールマガジン発信中！

本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

● お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)
literacy * lib.u-tokyo.ac.jp
(*は@に置き換えて送信してください。)
<http://www.dl.litc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>
(ツイッター http://twitter.com/gacos_today)

お知らせ

大学院工学系研究科・工学部

「インターナショナル・フライデー・ラウンジ」スタート！

工学系研究科では、毎週金曜日の12時から13時の間、工学部11号館の2階にて、留学生との国際交流会であるInternational Friday Lounge(IFL)を開催しています。IFLは、国際化が進む社会の流れに沿って東京大学の留学生受け入れ人数も増えている中、東京大学の学生が留学生とのコミュニケーションを通して国際交流を積極的に深めることができる場を創り、広げて行きたいというコンセプトのもとに始まりました。

現在、IFLは2年目を迎え、毎週40～50名ほどの方に参加していただいています。お昼時ですので、お弁当を持参して来られる方が多く、昼食をとりながらの笑いに溢れた和気あいあいとした会となっています。



バルコニーで会話を楽しむ

IFLの特徴はとにかく「自由」なところ です。IFLには何時来て何時帰っていただいてもよく、話すトピックも趣味の話からそれぞれの出身の国の文化の話、時には研究や政治等の深い話まで様々です。会話は基本的には英語で行われていますが、あまり英語に自信がない方でも、スタッフや周りの方がサポートさせていただきますし、時には日本語で話されても留学生の日本語の勉強に役立つこととなります。

また、IFLでは不定期ではありますがイベントも開催しております。先学期のイベントではIFLの参加者で“Bear Tour！”と称し、恵比寿にあるエビスビール記念館を訪れ、今学期は留学生向けではありますが、「お箸」の正しい使い方講座を開講いたしました。今後、協定校へ留学した日本人学生の体験を発表する「留学報告会」や日本人学生の出身地の紹介などさまざまな企画を立てていく予定です。

IFLへの参加を通して、英語を使った国際コミュニケーション力を高めること、他国の文化を知ること、また多くの人と知り合い友達になることなど、様々な機会を得ることができると思います。

「インターナショナル・フライデー・ラウンジ」はどなたでもいつでも自由にご参加いただけます。事前登録などは不要です。一度IFLへ足を運んでみませんか？皆様のご参加を心よりお待ちしております。

期間：10月15日 - 2月4日 毎週金曜日
但し、12/24, 12/31は冬休み
※次回(最終)開催は2月4日(金)となります。
是非ご参加下さい。
場所：工学部11号館2階ロビー
(スターボックスの2階)
時間：12:00～13:00



IFL のポスター



お箸のセミナー

お知らせ

サステナビリティ学連携研究機構

公開シンポジウム「地球温暖化・少子高齢化社会に対応した新しい社会づくりを目指して—21世紀 持続可能な日本とは?—」開催のお知らせ

サステナビリティ学連携研究機構では、以下のとおり公開シンポジウム「地球温暖化・少子高齢化社会に対応した新しい社会づくりを目指して—21世紀 持続可能な日本とは?—」を開催いたします。多くの方のご来場をお待ちしております。

- 日時：2月12日(土) 13:30～17:00
- 会場：安田講堂
- 主催：サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S)、一般社団法人サステナビリティ・サイエンス・コンソーシアム (SSC)
- 協賛：三井不動産(株)
- 後援：日本経済新聞社、環境科学会、

(社)日本造園学会、(社)日本都市計画学会

■入場無料

■シンポジウム概要

21世紀中盤に向け、全国の地方都市が発展する上で避けて通れない課題が少子高齢化と地球温暖化への適応であり、これらは相互に影響を与えている。例えば、地球温暖化の進行によって熱波、大雨、干ばつなどの気候災害が増大すると予測されているが、一方で、高齢化が進み財政の厳しい地方都市では、どのようにして温暖化に適応していくのであろうか。また、低炭素都市のカギと言われるコンパクトシティ構想は、高齢化社会においてはどのようなメリットを持つのであろうか。

さらに、このような作業を進めてゆくためにもさまざまな利害関係者の合意を形成する必要がある。そのためには、科学的な知識、および、現在の状況、将来のリスクなどについて理解を深めていく必要がある。

今回の公開シンポジウムでは、我が国の地方都市を対象に、地球温暖化、少子高齢化への対応という2つの重要課題をキーワードに、情報の社会への提供と社会的合意形成と、IR3Sのミッションである環境、経済、社会各政策を統合した持続可能な社会の実現に向けた方策について論じる。

<プログラム>

第I部(挨拶、講演)

□開会挨拶

小宮山宏 SSC理事長・前総長

□講演

武内和彦 IR3S副機構長・国際連合大学副学長

江守正多 国立環境研究所地球環境研究センター温暖化リスク評価研究室室長

秋山弘子 高齢社会総合研究機構特任教授

諸富徹 京都大学大学院経済学研究科教授

第II部(パネル・ディスカッション)

モデレーター:

花木啓祐 IR3S兼任教授・大学院工学系研究科都市工学専攻教授

パネラー:

第I部講演者

大田昌博 山梨県道志村村長

室山哲也 NHK解説委員

閉会挨拶

住明正 地球持続戦略研究イニシアティブ(TIGS)統括ディレクター・教授

※なお、講演者・パネラーについては変更の可能性もございますので、ご了承ください。

■お申込み方法

IR3S ウェブサイト

(<http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/event110212>)

からお申込みください。

■問い合わせ

サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S)

E-mail: info_ir3s@ir3s.u-tokyo.ac.jp

TEL: 03-5841-1539 (内 21539)

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第70回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会が主催する第70回小石川植物園市民セミナーが下記の通り開かれます。今回は、本学大学院理学系研究科の塚谷裕一教授による、ボルネオ島での野外植物調査に関する講演です。種多様性が高いことで知られるボルネオ島の熱帯雨林でも、樹木の伐採による影響が拡がりつつあります。ボルネオにはどんな植物があり、それらは今どうなっているのか、そして今後の保護はどう進められようとしているのか、最新の現地調査のようにも触れられる絶好の機会です。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

講師：塚谷 裕一 (大学院理学系研究科)

演題：「ボルネオ島カリマンタンの植物調査～ Heart of Borneo 計画に向けて～」

日時：2月19日 (土) 14:00～16:00

場所：理学系研究科附属植物園本園 (小石川植物園) 柴田記念館

参加費：無料 (但し、一般の方は入園料が必要です)

参加申込方法：2月12日までに、往復葉書または電子メールにて後援会までお申し込み下さい。返信葉書ないし返信メールが招待状となります。なお参加ご希望多数の際は、お申し込み順に従い受付が締め切られることがあります。悪しからずご了承下さい。

主催・参加申込先：〒112-0001 文京区白山 3-7-1

東京大学大学院理学系研究科附属植物園内
小石川植物園後援会

koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp

問い合わせ先：理学系研究科附属植物園

杉山宗隆准教授 (03-3814-0368)

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

平成22年度 第3回農学生命科学研究科技術職員研修会開催のお知らせ

本年度農学生命科学研究科技術職員研修会を下記の通り開催します。今年で3回目を迎えるにあたり、新しい歩みを始めている「附属生態調和農学機構」で開催することになりました。

研究科内の技術職員に限らず、他部局の技術職員・教員・事務職員・学生等どなたでも参加できます。当日も受け付けておりますので奮ってご参加下さい。

日時：3月3日 (木) 13:00～3月4日 (金) 12:00

会場：附属生態調和農学機構 (東京都西東京市緑町)

<http://www.isas.a.u-tokyo.ac.jp/campus/index.html>

内容：

3月3日 (木)

13:00 研究科長挨拶

13:10 技術職員発表

14:55 退職者講演「人と機会に恵まれて」

技術基盤センター 後藤茂子 技術専門員

15:40 生態調和農学機構見学等

17:30 懇親会

3月4日 (金)

9:00 技術職員ポスター発表

10:30 特別講演「フィールドのデジタル化による
教育研究情報の記録・蓄積・発信」

新領域創成科学研究科 斎藤 馨 教授

12:00 閉会挨拶

受付は3月3日 (木) 12:00から「生態調和農学機構別館 A 棟2階大教室」にて行います。

問合せ先：附属生態調和農学機構 久保田浩史

Tel: 070-6442-9482

E-mail: cbx@fm.a.u-tokyo.ac.jp

三ヶ月章名誉教授

本学名誉教授、学士院会員三ヶ月章先生は、昨年11月14日に逝去されました。享年89歳でした。

先生は、1944年に東京帝国大学法学部法律学科を卒業され、特別研究生を経て、1950年に東京大学法学部助教授、1959年には教授に就任されました。以来、1982年に停年により退官されるまで、33年の長きにわたり本学において研究・教育に従事され、民事訴訟法学の発展に多大の貢献をされるとともに、多数の研究者を養成されました。1962年には「強制執行と滞納処分の一元的理解」の論文により法学博士の学位を取得されました。また、1976年から78年まで法学部長を務められるなど、学内行政にも尽力されました。東京大学運動会ヨット部の部長を1967年から1982年までの15年にわたってお務めになり、1980年から82年には東京大学運動会理事長も務められました。

本学退官後は、1992年に法務省特別顧問に就任され、1993年8月に発足した細川内閣では法務大臣に就任されました（翌年4月まで）。また、1989年の民事保全法、1996年の民事訴訟法の制定の際には、法



制審議会民事訴訟法部会の部会長として部会の審議の取り纏めの重責を果たされました。法務大臣退任後は、アジア諸国の法律家の交流に心血を注がれ、2003年のローエイシア東京大会の組織委員長として同大会を成功裡に挙行した功績も忘れることができません。さらに、1984年に紫綬褒章、1995年に勲一等瑞宝章を受章され、2005年には文化功労者、2007年には文化勲章を受章されました。ご逝去の後、従三位に叙せられました。

先生の学問的功績は、民事訴訟法にとどまらず、裁判法・司法制度論から、強制執行法、倒産法にまで幅広く及んでいますが、とりわけ、それまでの支配的な見解であった旧訴訟物理論に異を唱えて、新訴訟物理論を主張して民事訴訟法学に新風を吹き込んだ点は特筆すべきものです。先生は、様々な分野において、基礎理論から具体的な解釈論に至るまで豊かな議論の場を多数作り出し、一貫して学界の議論をリードし続けられました。先生の代表的な著書として、『民事訴訟法』（有斐閣、1959年）や『民事訴訟法研究（全10巻）』（有斐閣、1962～1989年）を挙げるができます。

常に後進の指導育成に心を砕かれ、若い世代との議論を楽しみにされていた先生が逝去されたことは哀惜の念に堪えません。先生のご遺徳を偲びつつ、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（大学院法学政治学研究科・法学部）

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（採用）			
22.12.16	尾山 大明	医科学研究所附属疾患プロテオミクスラボラトリー准教授	医科学研究所附属疾患プロテオミクスラボラトリー特任助教
23.1.1	川崎 雅司	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロニクス研究センター教授	東北大学原子分子材料科学高等研究機構教授
23.1.1	三村 秀和	大学院工学系研究科准教授	大阪大学大学院工学研究科助教
（昇任）			
23.1.1	霜垣 幸浩	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
23.1.1	高井まどか	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
23.1.1	奈良 一秀	大学院新領域創成科学研究科准教授	アジア生物資源環境研究センター助教
（兼務命）			
23.1.1	岡村 定矩	国際高等研究所長	大学院理学系研究科教授
23.1.1	福山 寛	低温センター長	大学院理学系研究科教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

第61回 駒場祭 開催

平成22年11月21日(日)～23日(火・祝)の3日間、東京大学駒場 I キャンパスにおいて、駒場祭委員会主催の第61回駒場祭が開催されました。来場者数は約99,000人(昨年度94,000人)に上り、開催期間中、キャンパス内は賑やかな雰囲気に包まれました。

いよいよ開門!



各種企画



参加企画数は454企画に上りました。

駒場祭委員会 特別企画



駒場祭委員会主催の特別企画として、「はやぶさ」の川口淳一郎教授を招いての講演会、田原総一郎氏・東浩紀氏・佐々木俊尚氏3名による公開鼎談が行われ、両企画とも満員となりました。

学術企画



東京大学の最先端の研究内容に触れられる学術企画。大勢の来場者が訪れました。

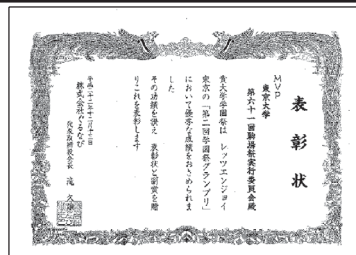
公式マスコットキャラクター こまっけろ



ぬいぐるみや携帯ストラップも販売され大人気でした。(中の人はいません。)

祝

学園祭グランプリ MVP受賞



イベント情報サイト「レッツエンジョイ東京」の主催する「第2回学園祭グランプリ」において、第61回駒場祭が見事グランプリを獲得しました。審査ポイントは「一般人でも楽しめる学園祭」。総合大学ならではの多彩でエネルギッシュな企画や、エコへの取り組み等が評価されました。

おかげさまで今年の駒場祭も無事に終わることができました。ご協力いただいた、学内関係者の皆様、ご来場の皆様に深く御礼申し上げます。来年もよろしく願いいたします。

本件連絡先: 教養学部等学生支援課学生支援係(羽田野)
TEL:03-5454-6073

Contents

特集

02 東京大学ロゴ事典

NEWS

一般ニュース

- 04 本部外部資金課
平成22年度科学研究費補助金審査委員の5名表彰される
- 04 地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)
第7回地球観測に関する政府間会合 (GEO) 総会および閣僚級会合が、北京で開催される
- 05 高齢社会総合研究機構
「千葉県在宅医療推進寄附プロジェクト設立記念講演会」を開催しました
- 06 本部国際企画課
「第8回プレジデント・カウンシル」の開催
- 07 本部留学生・外国人研究者支援課
平成22年度第2回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催される
- 07 学生相談ネットワーク本部
講演会「発達障害と共に生きる」を開催
- 08 地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)
「データ統合・解析システム」(DIAS) 終了時評価報告会を開催しました
- 09 本部署務課
平成22年度教育実習・介護等体験報告会及び懇談会を開催
- 10 本部学生支援課
第57回総長杯争奪水上運動会が開催される
- 11 総括プロジェクト機構
「日本の航空の明日を考える～日本の航空100年記念フォーラム～」開催
- 11 海洋アライアンス
中学生を対象にしたミニ講義を行う
- 12 国際化推進学部入試担当室
「国際化推進学部入試担当室開室記念式典」開催
- 13 本部署務課
「学生支援センター」の館銘板設置
- 14 本部総務課
2010年度業務改善総長賞表彰式の開催
- 15 本部企画課
「行動シナリオ」と「職員アンケート」の説明会、開催される
- 16 本部キャリアサポート課
公開シンポジウム「大学教育と職業との接続を考える」第2回開催
- 17 海洋アライアンス
海洋リテラシープログラム「海洋教育促進研究センター(日本財団)プログラム」発足 調印式・記者会見
- 17 本部研究推進課
柏市と連携協力に関する協定を締結

部局ニュース

- 18 大学院理学系研究科・理学部
留学生見学旅行、実施される
- 18 大学院農学生命科学研究科・農学部
公開講座「ベレット・薪利用で創る癒しの森」
- 19 柏キャンパス・リエゾン室
柏キャンパス10周年記念一般講演会
- 20 柏キャンパス・リエゾン室
柏キャンパス一般公開開催
- 20 大学院人文社会系研究科・文学部
外国人留学生見学旅行を実施
- 21 大学院法政政治学研究所・法学部
10月期新入生歓迎会を開催
- 21 物性研究所
技術職員研修「レーザー技術」開催される
- 22 環境安全研究センター
市民と共に本郷キャンパス落ち葉の堆肥化を実施中
- 23 先端科学技術研究センター
日独若手研究者交流、行われる
- 24 社会科学研究所
第24回社研シンポジウム「現代日本のガバナンス」を開催
- 24 大学院農学生命科学研究科・農学部
動物慰霊祭開催される
- 25 大学院情報理工学系研究科
創造情報学専攻の田中久美子准教授が著書「記号と再帰」でサントリー学芸賞と大川出版賞を受賞
- 25 大学院工学系研究科・工学部
ルース在日アメリカ大使と東大大学院生の交流会を開催
- 26 生物生産工学研究センター
シンポジウム「微生物代謝研究におけるケミカルバイオロジーの最前線」開催される

◆表紙写真◆

「祝ウサギ年。北海道演習林に住むユキウサギ」
(撮影者：大学院農学生命科学研究科附属演習林北海道演習林 及川 希さん)

- 26 社会科学研究所
ソウル大学日本研究所職員来所
- 27 物性研究所
事務職員向け「物性研見学ツアー」開催!
- 28 医科学研究所
附属病院でクリスマス・コンサート開かれる
- 28 大学院工学系研究科・工学部
埼玉県教育局 SPP (サイエンス・パートナーシップ・プログラム) 開催される
- 29 史料編纂所
公開研究会「江川文庫古写真コレクション調査報告」を開催
- 29 先端科学技術研究センター
ひらめき☆ときめきサイエンス「ロボットで探る昆虫の感覚と脳の行動の不思議」開催
- 30 大学院工学系研究科・工学部
光子科学研究センター・レーザーアライアンス 合同シンポジウム / 第9回 先端光子科学アライアンスセミナーが開催される

キャンパスニュース

- 32 本部留学生・外国人研究者支援課
平成22年度外国人学生数一國費外国人留学生数1,145人、私費外国人留学生数1,943人 外国政府派遣留学生数33人、その他の外国人学生(在日外国人学生)数283人

コラム

- 36 決算のDOOR ～数字が語る東京大学 第4回
- 36 ASIAN DIVERSITY No.4
- 37 Policy + alt vol.16
- 38 Crossroad 産学連携本部だより vol.62
- 39 インターブリタニアズバイブル vol.42
- 39 PC リユースのわ 第15回
- 40 Relay Column「ワタシのオシゴト」第59回
- 40 コミュニケーションセンターだより No.72
- 41 ～総長通信～ President's Improvisation Vol.3

INFORMATION

募集

- 47 本部学生支援課
平成22年度第2回「東京大学総長賞」の募集について

お知らせ

- 48 退職教員の最終講義
- 48 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第535(1月5日)号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——
- 48 情報基盤センター
「はじめての経済学論文・企業情報の探し方」ほか
「情報探索ガイダンス」各種コース実施のお知らせ
- 50 大学院工学系研究科・工学部
「インターナショナル・フライデー・ラウンジ」スタート!
- 51 サステナビリティ学連携研究機構
公開シンポジウム「地球温暖化・少子高齢化社会に対応した新しい社会づくりを目指して—21世紀 持続可能な日本とは?—」開催のお知らせ
- 52 大学院理学系研究科・理学部
第70回小石川植物園市民セミナーのご案内
- 52 大学院農学生命科学研究科・農学部
平成22年度 第3回農学生命科学研究科技術職員研修会開催のお知らせ

訃報

- 53 三ヶ月章名誉教授

事務連絡

- 53 人事異動(教員)

巻末特集

- 54 第61回駒場祭開催

淡青評論

- 56 柏からの雑感



七徳堂鬼瓦

柏からの雑感

勤務先が本郷キャンパスから閑静な柏キャンパスに移ってきて7年目になる。最初は2つの研究所しかない寂しいキャンパスで、お昼の食事時を除けば外に人がめったに歩いてなかった。その後、様々な部局が移転・新設され、本郷・駒場には遠く及ばないが柏キャンパスも賑やかになってきた。また、最近では数物連携宇宙研究機構ができ、多数の外国人研究者所属し、国際色豊かになった。現在では相当数の教職員・学生がいるはずであるが、学部学生がいないためか非常に落ち

ち着いた雰囲気です。それが冒頭の「閑静な」という言葉につながるのです。

私自身は柏キャンパスの雰囲気や建物（人間味がないという人も多いが）が気に入っている。もちろん、食堂やショップなど不満な点もあるが、最大の難点はやはり他のキャンパスと離れていることである。柏キャンパスに属する教員の多くは本郷にある研究科に関係しており、教育や様々な会議のため本郷キャンパスに行かなければならないことがよくある。たとえば、本郷で1時から会議があるとなると11時半には柏を出発しなければならない、会議が3時に終わるとすると柏に戻るのには4時半頃になる。これではその日は落ち着いて仕事をするにはできないし、なりより移動のための時間が会議の時間より長いと思うとやりきれない気持ちになってしまう。この問題はこれまでも指摘され、テレビ会議システムの活用などが提案されているが、あまり改善されてないようである。国際ワークショップでもテレビ会議を使った講演が行われ、スカイプを使って外国にいる共同研究者と議論することも頻繁に行われる時代なのだから、移動の時間を節約する方法をもっと活用すべきだと思うが・・・

ただ、この考えを進めていくと、インターネットを使えば自宅でほとんどのことができ大学にすら行く必要がなくなり、自分が引きこもりになってしまう恐れが出てくる。そう考えると、やはり人と直接会って話をするのが一番と思ったりもする。世の中難しいものである。

（宇宙線研究所 川崎雅裕）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1408 2011年1月25日
東京大学広報室

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp/>